ポケットモンスター　『移動カフェ"安らぎ"』

sisid

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

移動カフェ”安らぎ”の店主、アンペルと色違いの小さいサーナイト”サナリス”

この二人のゆったりとしたお話です。

目次

第一話　移動カフェ”安らぎ”　1
第二話　大丈夫　7
第三話　仮面　19
第四話　気持ちを込めた手作り　27
第五話　好きは最強　34
第六話　頭脳戦　49
第七話　記憶しておきなさい　62
第八話　Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ？　74
第九話　楽をする為なら　88
第十話　無駄なこと　93
第十一話　コンプリート特典　100

第一話　移動カフェ”安らぎ”

「はぁ……」
　ホウエン地方のカナズミシティのポケモンセンターにて一人、深いため息を溢す少年がいた。先程、ポケモンバトルをして見事に完敗したのである。
　カナズミシティにあるポケモンジムに一昨日負けてから、力をつけようとポケモントレーナーとバトルをしていたが、全戦全敗。
「才能ないのかなあ」
　ポケモンの治療が終わり、ポケモンセンターを出る。そんな落ち込む彼に、良い香りが漂ってきた。なんとなくその匂いの方へ目を向けると、左手の薬指に、手作り感のある緑に輝く指輪をつけており、黒髪のアシメで穏やかな表情をしている、その少年よりは一回りぐらい歳が離れているが、それでも若い青年が車の中でカフェを営んでいた。
　ミニスカートの女の子たちが揃って飲み物をもらった後、歩きながらその飲み物を美味しそうに飲んでいる。少年はなんとなく、そのカフェに足を運んだ。
「いらっしゃい。ご注文はお決まりですか？」
「ええっと、ちょっとだけ待ってください」
「はい」
　穏やかで、安らぐ声だ。少年はホットカフェオレを頼むと、青年はさっそく準備に取り掛かった。
「…なにかありましたか」
「え？」
　良い香りを漂わせながら、反時計回りにゆっくりと混ぜている最中、彼は少年にそう聞いた。
「失礼、元気がなさそうに見えたので」
「そうですか。…そうですね。僕、まだ駆け出しのポケモントレーナーなんですけど、全然勝てなくて…今日も戦ったんですけど、完敗で。始めの頃はまだ勝てたのに、少しぐらいしてから壁にぶち当たっ

てて」
「そうなんですか。ポケモントレーナーでしたか」
「え？はい。あれ、そう見えませんか？」
「ポケモンを見てませんから。はい、お待たせしました」
「あ、ありがとうございます」
　渡されたカフェオレを飲むと、ほんわり落ち着いた。温かく、荒んだ心が癒やされていくような、そんな気分になる。
「貴方の手持ちのポケモンは？」
「えーっと一匹だけですけど、出ておいでミズゴロウ」
「ミジャア」
　元気そうに振る舞うその少年のミズゴロウ。それに対し、カフェの青年は優しく微笑む。
「サナリス」
「サァ」
「サナリス…？わっ、綺麗」
「サーナイトというポケモンです。僕は彼女にサナリスと名付けています。他のサーナイトとは色素が違うので、貴方は非常に運が良い」
「へえ…髪が綺麗で…」
　左に、透き通った綺麗な緑色の宝石が装飾されている腕輪をつけている。サナリスはミズゴロウにパンを渡す。ポケモンでも食べられるオボンのジャムが塗ってあるパンを、ミズゴロウは嬉しそうに食べる。
「一度の経験が、自身の成長を妨げることもある」
「え？」
「勝つことだけがポケモンバトルではありません。いかにポケモンと寄り添えるかが大事だと、僕はそう思います」
　青年はミズゴロウを優しく撫でる。
「負けたくないという気持ちは大事ですが、気負い過ぎると逆効果ですよ。この子をしっかり見てあげれば、カナズミジムであれば戦えるはずです」
　その穏やかな声色と同じ、穏やかな表情でそう言った。

「心の声を、読み取ってください。そうすれば…」
「た、助けてくれえ～!!」
「…おや？」
　大人の助力の声が、サナリス達のところまで聞こえてくる。カナズミシティの中でも飛び抜けて大きいビル、デボンコーポレーションから赤い衣装を纏った男がカバンを持って走って行っていた。その後ろからコーポレーションの社員であろう男が息を切らしている。
「どうされましたか？」
「あ、ああ。大事な書類を、マグマ団に盗まれたんだ！あれが…なきゃ…はぁ……はぁ…」
「深呼吸を。僕がこの少年と共にその大事な書類とやらを取り返して見せましょう」
「え!?」
　少年の手を掴み、サナリスにコンタクトを取ると、場が一転、いつの間にか先程の赤装束の男の目の前に立っていた。
「なっ…!?なんだおまえら！」
「その手に持っているカバンを取り戻したく、やってまいりました。抵抗はしない方がいいですよ」
「うるせえ！これは必要なもんなんだ！いけ！ポチエナ！」
「ほう、ポチエナですか。ミズゴロウを出してあげなさい」
「えっ、あ、はい。…よし！いけ！ミズゴロウ！」
　少年はミズゴロウを出して、早速構える。ポチエナのことを観察し始めた。
「へっ、ミズゴロウ如きで俺のポチエナがやられるかよ！ポチエナ！”かみつく”だ!!」
「躱せ！ミズゴロウ！」
「ミッ!!」
　トレーナーの声に反応出来ず、かみつくをモロにくらってしまうミズゴロウ。
「くそっ！ごめんミズゴロウ、反応が遅れた！次はこっちの番！ミズゴロウ、み…」

「ストップ」
「えっ」
　後ろから両肩にそっと手を置き、顔を少年の耳元に近づけ、静かに呟きはじめたのは、カフェの青年。
「貴方は、エリートトレーナーですか？」
「い、いえ」
「そうですよね。ですが、貴方の動きはエリートトレーナーそのものです。冒険を始めたトレーナーとしての段階を飛ばしている」
「段階…？」
「僕が貴方に言ったことを思い出して」
　そう言うと、手をどけて再び後ろに下がる。少年は青年に言われたことを思い返す。声に何か仕掛けでもあるのか、こころが落ち着いていた。
「作戦会議は終わったか？何してきても変わらねえけどなっ！ポチエナ！もう一度”かみつく”だ!!」
「エナァ！」
「ミズゴロウ!”みずでっぽう”!」
「ミッジュゥ!!」
「なに!?」
　今度はポチエナを見ない。ポチエナのかみつくの前に、みずでっぽうが命中する。見事にポチエナより早く攻撃をすることが出来たことに、ひどく興奮する。
「ミズゴロウ！もう一回！」
「ポチエナ！くっ…!!」
　みずてっぽうが決まり、ポチエナは戦闘不能に。それを見て青年から拍手を贈る。
「やはり地力はありますね。お見事です。ミズゴロウも、久しぶりに勝てて嬉しいでしょう」
「はい！俺、なんか今ならジムも負けない気がします！」
「ええ。きっとそうでしょう。…さて、返してもらいましょうか」
　青年が敵に目を向けると、舌打ちをされる。

「そういうわけには行かねえんだよ！」
　そう言ってカバンを持って逃げようとする。が、すでに向かう先は青年達がおり、下がればさっきのところへ。どうすればいいか考えようとした時、自分の身体が宙へ浮いていることに気づく。
「カバンを離しなさい。そうすればそこから落とさずに助けてあげます」
「お、おい、冗談だろ？そんな非人道的なこと…」
「ちなみに高度はどんどん上がっていくので、そこのところはよろしく」
「ひっ!!分かった！分かったぁ!!」
　情けない声を出しながらカバンを離す。そのカバンも、敵もゆっくりと降ろされる。
「サナリス。ご苦労様」
「サナァ♪」
　撫でられご機嫌になるサナリス。その光景が微笑ましいと思うと同時に、青年の脅し文句が怖いと思う少年でもあった。
「…あれ？技…」
「落??とすなんて、冗談なんですけどね。…さて、返しに行きましょうか??????????????????
「あ??????????????????
　はい」
「さ??て、急な出来事が起きてしまったために、もうこんな時間ですね」
　太陽が眠りに落ちそうな時間帯、オレンジ色でカナズミシティが染ま??ていた。
「あの！本当にありがとうございました！」
　おやすみが近づいているというのに、少年のその元気な声は疲れた社会人達の背筋を伸ばすほど。
「なんか、今ならジムで恥じない戦い方が出来そうです」
「それは良かった」
「それで…聞きたいことがあるんですけど」
「なんでしょう」

「どうやったらお兄さんみたいに強くなれますか？」
「えっ」
　目を輝かせながら聞いてきた。青年はポリッと頬をかく。
「僕はそんなに…」
「いいえ、絶対強いです！」
「あはは…恥ずかしいですね。ですが僕はしがない移動カフェの店主。今日のはたまたま…ということにしておいてください」
「えぇ…じゃあ、名前だけでも」
　青年はそういえば名乗ってなかったなと言われて気づく。そして優しく微笑んだ。
「僕の名前はアンペル。また、どこかで巡り会いましょう」

第二話　大丈夫

『ポケモンコンテスト、マスターランクの優勝は一体どちらでしょうか！審査員の結果は…』

ブチッとテレビを消す。自室の部屋でポテトチップスを食べながら、クルマユのごとく布団に包まっている。

シンオウ地方、ヨスガシティ。ポケモンジムの他に、ポケモンふれあい広場や、ポケモンコンテストの会場があったりとなかなかの都会。

そんな街で、家族と暮らしているがここずっと部屋に篭りきりの少女がいた。

私、なにしてるんだろ。

ふとそう思う。小さい頃はどんなことがあっても楽しみながら頑張ってたのに。月日を重ねていくごとに限界を見るようになった。それから自分に失望して…よくお母さんとも話してたのに、今じゃドア越しで…っていうか話してない。

良くないことだって分かってるけど、お母さんからも、周りの人達からの視線からも今はもう怖くて動けない。

ここから出て『大丈夫』って聞かれるのが嫌だ。言われるのも嫌だ。

最低だ、私って奴は。

カーテンを開ける。外は雨で、昼なのに暗い。まるで自分自身を映しているような…

「……えっ？」

一筋の光が地上から上へと飛んでいくのが見えた。すると一変、天使のハシゴが見えた。そして見る見るうちに虹がかかり、先程までが嘘かのように晴れ渡る。

「まさか…」

少女は突然身体を起こし、自らその空間から飛び出した。バタバタと階段を降り、青いボサボサの髪も、パジャマも何もかもそのままの状態でサンダルを履いた。

「ちょ、ちょっとアキ!?」

母親の声も聞かず、行ってきますと叫んで走り出した。玄関を開けて、少し走り出した後、ガサッとポケモンか何かが動いたようだが、それすら気づかずその光差した方角へ。
「ハァ…ハァ……」
そこはヨスガシティから少し外れた自然溢れる道路だった。
「おや？」
その声に反応した。アキの視界に入ったのは頭を撫でられている通常より一回り、否、二回りほど小さい色違いのサーナイトと、そのポケモンのパートナーであろう青年だった。
サナリスとアンペルだ。
「息が上がっていますが、どうしましたか？」
アンペルにそう言われ、アキは呼吸を落ち着かせることなく聞いた。
「ガーディを！ガーディを見ませんでしたか!?」
「ガーディ？」
”にほんばれ”を、誰かがしたんです！もしかしたら…」
「ああ、それはこの子ですよ。実は今日ヨスガシティでカフェを展開する予定でしてね」
「サァナ」
「え…サーナイト？」
「はい。サナリスって呼んでください」
「サナ！」
「……」
そっか…そうだよね。いるわけないんだ。ガーディがいるはずなんてない。私のことなんてあの子はもう忘れてるんだ。私のせいだ、私のせいなんだ。私があんなことを言わなかったら…
「え、あの」
「……え？」
「なんで泣いているんです…？」
「え？…あれ？あれ？なんで、なんでだろう。違う、違うんです。私、泣きたくなんか…止まって、止まってよ…ねえ、なんで……!?」

その場でうずくまるアキに、アンペルは少し動揺するが、サナリスと目が合う。その視線でアンペル頷き、キャンプ用のテーブルと椅子を用意し、そして車の中でアキの年齢に見合った温かい飲み物を作り始めた。
「サァナァ」
「ひっく…そんな、いいです……」
「泣いている人を放ってはおけません。僕達はこれで商売をしていますが、今日は特別ですよ」
「うぅ……」
言われてアキは椅子に座り、飲み物を飲んだ。甘く、どこか酸味もあるようなお茶。移動カフェ”安らぎ”特性、『ソクノ茶』。
ソクノのみの果汁と薄皮、そしてハチミツを入れ一晩おいて完成させたもので、お湯で割ってしっかりとかき混ぜるだけで美味しく出来上がる。
身体がうちからポワポワと、先程まで走っていたから元々熱いのだが、それでも飲める。ほんわりと身体が気持ち良い。
「…ふぅ……。ありがとうございます」
「いいえ。こちらの非でもあるようですので」
「えっ？」
「ガーディと勘違いしたようなので。大切な貴方のポケモンなのでしょう？」
「……あの子は、そう思ってないと思い…ます」
そう言って俯くアキ。アンペルはアキと対面するような形で椅子をもう一つ用意してそこに腰を掛けた。
「良ければ話してみませんか。お客様…では無いけれど、僕のブレンドを頂いている方が笑顔じゃないのは、どうも落ち着かない」
「……」
アンペルは口をつぐんでしまったアキを見て、しばらくしてからこう言った。
「人の我慢というのはバケツのようなものです」
「……え？」

「感情や、気持ちを押し殺そうとする度に、我慢というバケツの中に入れていく。ですが人によって”容量”や、”数”が違う。貴方は我慢出来ずにここへ来た。バケツから”気持ち”が溢れ出て涙を流した。そして落ち着いた今、また言おうとせずにそのバケツの中に感情を詰め込もうとしている。…赤の他人にぐらいには話してみても良いのではありませんか」

「……ガーディは、生まれつき後ろの右足が少し悪い子なんです」

アキは深呼吸をした後そう言った。

私がまだポケモンを持っていなかった時、お母さんと一緒にヨスガシティを出てポケモンコンテストを観に行ったことがあった。

ヨスガシティにあるコンテスト会場はシンオウ地方で一番大きいけど、それ以外のところだって別に見劣りしていない。

私はそこで自由自在なパフォーマンスを見せるトレーナー達に感動した。

帰り道は歩きながら、その凄い人達のモノマネをするかのように踊っていた。

「ふんふ～ん♪」

「アキったら、すーっかりハマっちゃったわね」

「うん！私もいつかポケモンコーディネーターになって、有名人になる！」

「いいじゃない！アキならきっとなれるわ！」

お母さんはそう言って私を信じてくれた。そんな帰り道だった。

「あれ…？ねえお母さん、あのポケモン怪我してるよ？」

「あら、ガーディだわ。……弱ってるみたいね」

「大変！ポケモンセンターに連れて行こっ！」

今思えば危ないことをしてたなあって思う。野生のポケモンは気性が荒いってよく聞くし。それを抱き抱えて走ったもんだから、ほんと当時の自分は勝手になんでもできる子だと思ってたんだ。

ポケモンセンターで目が覚めたガーディは、右足が悪く、ポケモンに虐められていた可能性が高いと聞いた。

命からがらに逃げていたが、意識を失って、私に助けられた。
と、言っても当事者はそんなことを知らないわけで
「ガウッ！」
「ひゃっ！もう！私は命の恩人なんだよ！」
ガーディは、お世話するようになった私に対して威嚇したり、かみつくをしてきたり。でも怖くなかった。私はどんな時でも一生懸命になってガーディに寄り添った。
少しずつ、月日を重ねるごとにガーディの毛に触れれるようになり、警戒心のあった喉をゴロゴロと鳴らしていたあの音も、すっかり落ち着きのある音に。
「行くよっ！それーっ！」
「ガォオンッ！」
フリスビーすら、コツを掴んだのか右足が悪いことを忘れるぐらい軽快な動きでキャッチすることが出来るようになっていた。
三年も経てば以心伝心。目を交わすだけで何を考えているか分かるぐらいには、一緒にいた。
「…お母さん。私、ガーディと一緒にポケモンコンテスト、出る」
「そう！夢だったものね！アキなら大丈夫よ！」
「うん！頑張ろうね、ガーディ！」
「アウッ！」
そしてポケモンコンテストに備えての特訓を始めた。楽しい楽しい時間だった。
初めてエントリーして、初めてコンテストに出場した時の緊張は今でも忘れられない。
ノーマルランクっていうまだ何も実績にならないランクから初心者は始まるけど、スーパーランク、ハイパーランク、マスターランク全てクリアして、そして最後のウルトラランクに行く。そういう気持ちだった。
だけどマスターランクのところで私は初めて”壁”を感じた。
「マスターランク、優勝は○○さん！おめでとうございます！」
初めてコンテストで敗北した。ハイパーランクまでは順調だった

のに。
　マスターランクからは一次予選を通過した者だけが優勝争いに加われる。予選は通過出来たけど、優勝はできなかった。
「大丈夫よ。アキならやれるわ！」
　お母さんはそう言ってくれたし、審査員の方々も褒めてはくれた。近所の人たちからも。
　だから私とガーディは頑張った。
「ガウッ…」
「ガーディ！…そっか、右足が悪いものね、いくらコツを掴めたって言っても、何度も空中を舞うような動きをさせるのは酷だよね…」
「ガウッ!!」
「ううん！ダメだよ！私にはガーディしかいないから！無理して本当に右足が動かせなくなったら困るの！ガーディも困るでしょ？だからなんとか違うパフォーマンスを…」
　そして構築を練り直して二回目のマスターランク。予選落ち。
「なんで…？」
「大丈夫よ。あんなに頑張ってるんだもの。次は大丈夫よ」
　お母さんはずっとそう言ってくれた。そうだ、今、私は大丈夫。絶対マスターランク優勝して、ウルトラランクに行ってみせる。
「アウゥウ」
「ん…？毛布？あはっ、私そんな顔悪い？ごめんね、後少しだけ考えさせて。そしたら寝るから」
「アウ…」
　三回目、予選落ち。しかも前よりパフォーマンスにキレがないのが分かった。ガーディに指示を出すのが遅れた。ガーディの右足を気遣い過ぎてしまった。
　…あの子の右足が悪くなかったら…
「大丈夫。大丈夫よ」
「…お母さん、何が大丈夫なの？」
「えっ？」
「何も知らないじゃん。近所のお爺ちゃんも私のこと応援してくれれて

るし、『大丈夫』って言ってくれるけど、何も知らないじゃんか」
「……アキが頑張ってるのを私たちは知ってるからね」
「…うん。そうだね。ごめん！ネガティブなのは良くないね！」
元気に振る舞わないと。応援してる人たちに情けない姿は見せたくない。頑張らないと。もっともっと頑張らないと。
四回目、五回目、六回目……何回落ちた？いや、関係ない、落ちても何回でも受けれるのだから、その時予選通過出来るように頑張らないと。
「アンッ…」
ガーディはいつもそんな私に毛布を持ってきてくれるようになった。私はそんなに酷い顔をしているのか。鏡を見る暇もないぐらい、初めて見る壁が高過ぎて、分厚過ぎてどうすればいいか分からないせいで、でもそんな弱音は吐いちゃいけない。
「『大丈夫？』って聞いてるの？私に？」
「アウ」
「大丈夫だよ！私は！ほらこの通り！」
「……ガウッ！」
ガーディは大きく吠えると、空中で今までにみたことないぐらい大きく身体を捻り、舞って見せた。
「…ガーディ」
「ガウッ！ガウ！」
「……うん、分かった。あの時試そうとしてたこと、やってみよう」
そして何回目かのマスターランク一次予選、見事に通過。”だいもんじ”と，円状に作った”かえんほうしゃ”を空中に飛ばし、ガーディがその隙間を身体をアクセルのごとく捻りながら飛ぶ。その高度は非常に高く美しかった。
予選通過した次の種目で、さらに凄いのをお見舞いして見せようとした。
最初は同じ流れ、だけどそこから宙へ舞っている間に。
「”にほんばれ！”」
会場内をライト要らずの明るさに変える。それのおかげで炎の煌

びやかさが増す。
「フィニッシュ行くよ！だいもんじの真ん中を打ち抜け！”かえんほうしゃ!!”」
「ガウッ!!」
　空中にいる間、落下しながらかえんほうしゃを放ち、炎は散り散りに、けど儚くも美しい結晶のようにキラキラと。花火の最後のような残火。
　ーーよしっ！
　心からガッツポーズを決めた。これは優勝候補の人たちに比べても上だっ！そう思った。
「ガッ！」
「……えっ」
　さっきまでのお客さんの熱気が嘘かのように落ち込んだ。ガーディが、最後の最後で着地に失敗した。練習した時はちゃんと出来ていたのに、肝心なところで失敗したのだ。
「マスターランク、優勝は△△さんです！おめでとうございます！」
　目の前が真っ暗になった。っていうのはこのことを言うのだろう。
「アキ！今日は貴方の大好きなオムライスよ！今日は惜しかった！でもやっぱり大丈夫よ！予選通過出来るんだし、次こそ…」
「もういいや」
「えっ」
「もういい。今日夕飯いらない」
「え、ちょっとアキ！」
「うるさい！話しかけないで！なにが『大丈夫』？全然大丈夫じゃないよ！私の最高のパフォーマンス！今までで一番しっくり来た構築なの！それを次見せても、審査員の人達は『またか』ってなるだけなの！ポケモンコンテストはね、同じパフォーマンスを見せても優勝出来るほど、甘い世界じゃないのよ！」
「ご、ごめんなさい。でも、アキならきっとだいじょ…」
「その言葉、もう聞き飽きたよ！みんなそう言う！『大丈夫』『大丈夫』って！何が？どこが？根拠もないのにそんな言葉、易々と言わな

いで!!」
　今までにない、暴言の数々。お母さんは固まってしまった、そんなお母さんを横目に、私は隣にいるガーディを置いて、真っ先に二階の自分の部屋に戻って行った。うるさい物音を立てながら。
「あぁあああ!!もう!!なんで上手くいかないの!?何が足りないのよ！これ以上、何を頑張れば良いの!?」
「クゥウン…」
　ガーディが部屋にやってきた。ドアを開けた音すら気付かないぐらいに荒れていた。そんな私に、いつものように毛布を持ってきた。
　私は、それにイラッとして毛布を強引に奪った。
「…あんたがっ、あんたがしっかりしてれば!!」
「!!」
「あんたがちゃんと着地してれば優勝できた!!あんたが私に『大丈夫』って見せたから!!それを信じてあのパフォーマンスを見せたのに!!それなのに!!あんたが全て台無しにした!!!あんたのせいだ!!!」
「…アウ……」
「あんたのその右足のせいで、あんたがポンコツなせいで！私の最高のパフォーマンスはぜーんぶ台無し!!出てってよ!!しばらくあんたの顔なんて見たくないの!!出て行って!!」
「……アウ」
「出て行け!!」
「!!……」
　その時のガーディはどんな顔をしていたんだろう。もう憶えていない。罵詈雑言浴びせたその日から、ガーディは家を出て行った。
　私の心は空っぽになった。初めて一方的にガーディを追い詰めたからか、初めて我慢してた感情を吐き出してしまったからか、空虚で、何もしたくなくて、お母さんにも誰にも会いたくなくて、それでもたまにガーディが恋しくなって。ごめんって言いたくなって。
　そんなことを思いながら数ヶ月間ずっと自分の部屋に引きこもっては出て行かなかった。
　ごめんって言いたいって何様なんだろう。私にそんな資格はない。

ガーディは絶対戻ってこない。私のことが嫌いになって、きっと遠いところに行ってる。
そんなモノクロの世界の中、急に色がついたのが、今日”にほんばれ”を見た瞬間。

「私…本当ダメな人間なんです。自分がこんなにも弱いだなんて思ってなかった」
涙は流していないが俯き、ソクノ茶ももう飲み終わりそうだった。
アンペルは、「話を聞かせてくれてありがとう」とそう言ったあと続けた。
「貴方は、凄い人です」
「えっ…」
「好きなことに一生懸命で、ガーディのことを思ってパフォーマンスを考えて、努力して…素晴らしい才能の持ち主です」
「そんな…私には才能がない。だからマスターランク止まりで…」
「”努力に勝る天才無し”。貴方のその努力する姿勢は、誰も真似することができない。それを貴方の周りの人達は見てきた。だから、貴方の言った言葉を、信じている」
「言った言葉…？」
「ええ。だから今一番、貴方が欲しい言葉を周りの人達は言えない。僕に話をするのは大正解でした」
「どういうこと…ですか？」
アンペルは優しく微笑むと、立ち上がり、アキの髪を優しい手つきで撫でながら、いつもの声色で目を細めながら口を開いた。
「『大丈夫』」
「あっ…」
私の嫌いな言葉だ。無責任な『大丈夫』が大嫌いだ。何も知らないくせに。何が『大丈夫』なんだ。
嫌いだ。大嫌いだ。……それなのに。そのはずなのに、どうしようもなく込み上がるこの感情は”嫌悪”じゃない。
涙が自然と溢れるぐらい、ずっと欲しいと思っていたのを隠し続け

て我慢していた、もう一つのバケツだ。
「うぅ……ぅあ……」
「周りは貴方を見ている。貴方に無責任な『大丈夫』を何も考えずに口に出せるぐらい、貴方の頑張っている姿を見てきた。貴方の魅力は一言では現すことが出来ない。だから『大丈夫』です。貴方を信じて、皆、貴方が立ち直るのを待っている。ガーディも、貴方とまたコンテストに出たいと願っている」
「うぁあああ……！わ、わた、私、ガーディに会いたい……！また一緒にポケモンコンテストに出たいよぉ……!!」
「ええ、ええ、そうでしょうそうでしょう。初めて会った僕ですら、分かる気持ちです。貴方は素晴らしい才能の持ち主です」
　サナリスもアキを撫でる。綺麗な腕輪がにほんばれのおかげでさらに輝きを増していた。
　…ああ、他にも色んな魅せ方、あるじゃん。
　空っぽにしたおかげで何かが見える気がする。視界がクリアだ…
「ソクノ茶、ありがとうございました！美味しかったです！」
「それは良かった。良ければ送りましょう」
「え？どこへですか？」
「貴方の会いたいポケモンのところにです」
「え!?近くにいるんですか!?」
「ええ。サナリスはそういうのが得意なんですよ」
「サァナ！」
「えぇ…！お、お願いします！話したいこと、沢山あるから！」
「…ふふっ」
「な、なんですか？」
「やはり笑顔は素敵だな、と。ではサナリス、お願いします」
「サナ！」
　サナリスはアキの手を掴み、テレポートした。その先は…
「え…私の家……？」
「サーナイ」
「玄関よりちょっと歩いた先？あ、ちょっと」

サナリスは場所を少し示した後、すぐにアンペルのところへとテレポートして戻った。
これは、私の問題だものね。
先程とは違って、歩く。走らずに、周りを見ながら歩く。
他の人達がいる中で、私は大きく息を吸った。
ーー恥ずかしいけど、でも気持ちを吐き出すことは、悪いことじゃないって気づけたから。
「ガーディ！出てきて！私、貴方とポケモンコンテストに出たいの!!私のせいでごめん！ガーディのこと、大好きなの!!私のせいで今まで一緒に入れなかった時間、忘れるぐらい一緒にいたい！」
そしてもう一呼吸、大きな声で。
「私はもう、『大丈夫』〜!!!」
周りはザワザワしている。そんな中、少し先の草むらの茂みから、見慣れたポケモンがアキの前に現れた。
「…ごめんね。おかえりなさい」
「アウ！」
「会えましたね」
「サナッ」
「ふう…あの空気の中、僕たちはカフェをこれから始めますが…お客様？来てくれるかなあ…」
「サァナ！」
「そうですね。来てくれますよね」
アンペルは車を止め、準備をしながらサナリスとそう何気ない会話をしている。
ーー嫌いになったから出て行ったのではない。大好きだから出て行った…〝愛〟というのは、対になっていそうな言葉を、なんの矛盾もなく通してしまう。ガーディは、心の底から、貴方を愛しているのでしょうね。
サナリスと、アンペルの宝石がきらりと光った。

第三話　仮面

「マツタニ君！この案件の資料作りまだ終わってないのかい!?」
「すみません。先程、部下に資料の添削頼まれて、並行してやってるので…」
「ああそうなのか！すまないが少しペースを上げてくれないか。定時までには済ませておきたいんだ」
「承知しました」
　言われたことを言われた通りに。清楚正しくスーツが似合う。メガネをかけたそのインテリの見た目に違わないその行動力と会社の貢献度の高さに、部下含め信頼を集めているマツタニは、今回も言われた通りに事を済ませる。
「ありがとう。マツタニ君、後はこれをよろしく頼むよ」
　上司に渡される更なる資料。残業がそこで確定したが、彼は表情を変えずその資料を手に取った。
「承知しました」
　そう言うと、またデスクトップと向き合い始めた。
　周りの内緒話が始まる。
「さすがマツタニさん。表情ひとつ変えてないぜ」
「ああ。知ってるか？噂だと、あの人のポケモン、ヤルキモノらしいぜ？」
「そうなの？私が聞いた噂だとジュカインだって…」
「うわーどっちのポケモンもありそうだなあ」
　その内緒話が内緒話にはなっておらず、マツタニの耳に届いていた。
「お前たち。仕事は済ませたか？もう退社の時間だぞ」
「は、はい！おかげさまで…」
「なら、早く帰るといい。私はこれを済ませてから帰るから、忘れ物だけはしないように」
「なら、手伝いましょうか？さすがに残業続きなのは…」
「構わない。慣れている。君たちは私の部下なのだから、しっかりと

休みなさい」
「か、かっけぇ…はい。ありがとうございます。お疲れ様でした！」
部下のみんなはそうして帰っていく。そして上司も帰る。マツタニだけが会社に残り、それもようやく終了する。一時間弱の残業で済ませて伸びをした後、退社する。
「ふう……」
だーれが俺の手持ちがヤルキモノだジュカインだとか言い出しやがったんだ!!
マツタニは誰にも見られていないことを確認してから地団駄を踏む。
俺がそんな可愛くないポケモンを手持ちにするわけねえっての!!
俺だって別に残業したくしてしてるわけじゃねーっつぅのよ！なんか成り行きでエリート感出すようになってからこういう立場になったたけだっつーの！ハァー代わってもらえるなら代わってもらいてえよ!!
こう言う時はちょっと早いけど、今日は公園まで行ってもう癒されよう。会社内にポケモン出すのダメなの窮屈だけど、出すまでの我慢を解放できるこの時間は至福だぜ。
マツタニは手持ちのポケモンを外へ出した。
マツタニのパートナーは、イーブイ。
「ブイ！」
「はぁぁああお前は相変わらず可愛いなあ!?」
「イーブイ!!」
「最高！生きる理由だよイーブイ!!」
ベンチに座ってはぎゅーっと抱きしめて、麻痺はしないがマツタニのほっぺすりすりが炸裂する。
「…あの」
「あはあはは…ハッ!!」
そこにアンペルとサナリスが現れる。
ーー見られた!?公園内に人はもういないと思ってたのに!!
「これ、落としましたよ」

「えっ!?あ、これはこれは…ご親切にありがとうございます」
いつの間にかハンカチを落としていたらしく、それを届けに来てくれたようだ。
いやしかし…人前で恥ずかしいところを見られてしまったな…
「隣、いいですか?」
「はい。どうぞ」
マツタニは会社にいるように振る舞い始める。無表情に、どうぞと言って見せたが、内心はそんなところではなかった。
良いわけねえだろうがよぉ!俺はイーブイに元気をもらう為に家に帰るより先にここに来たってのに!今からイーブイにご飯もあげようと思ってたのにそんな姿見せられねえしくそぉおおお!!
…かと言ってハンカチを拾ってくれた人に対してそんなこと言えねえ!
「サナ?」
「ブイ。イーブィィイ!ブイブイ!」
「サァナ…サナ」
「ん?どうしましたか、サナリス」
サナリスの何かしらの問いかけに、イーブイは返答し、それに対して少し思考した後、サナリスはアンペルに声をかけた。
その後はただ二人、見つめ合っているのみで、ただただマツタニは気まずいだけだった。
何この時間。え、どうしましたか?の後無言ってありえる?普通なんか声掛けあったりしない?サーナイトってそういうポケモンなの?ええ、不思議すぎるが?
「失礼、すぐ戻りますので、お待ちいただけますか」
「えっ…はい。構いませんが」
「…ありがとうございます」
そう言って少しサナリスと共にどこかへ行くアンペルを見送った後、マツタニは自己嫌悪した。
違うじゃん?なぁにが構いませんなの?構うよ??なんで俺待たなくちゃいけないの?怖すぎるよさっきからあの人。何かを見透かし

てるかのように俺を見てくるし。あの綺麗に透き通った青い瞳が怖いわ。
　そう思いながら気を張るのは社会人故なのか…俺は今、イーブイに抱きつくことが出来ない…!!くぅ、おすわりしてるイーブイも可愛いなあ…!
　しかし表情は一切変えることをしない。アンペルとサナリスが何かを持って戻ってきた。マツタニは先程とは違って姿勢良く、ベンチに座っていた。
「お待たせしました」
「全然待っておりません」
「そうですか」
「はい。ところで、そちらはなんでしょうか」
「これはですね、自家製の食べ物です。実はですね、試食して欲しいなと思いまして」
「試食？」
「はい。僕、実は移動カフェ〝安らぎ〟というお店をしておりましてね」
「なるほど、それが新しいメニューというわけですか。しかし…そういうのは私のような人間ではない方が良いのでは？私は移動カフェがどのような仕組みで経営されてるのか知りませんが、上司に当たるものがあるのであればその方に…」
「あはは。いませんよそのような方は。移動カフェというのは、自分の自由に出来るのです」
「そ、そうですか。しかし…初対面ですから、その…」
「怖いですか？」
　ぐっ、図星だ。その優しい表情には何かしら裏があると思ってしまう…！だが、何故か安らぐな…なんだ？
　アンペルは無表情のマツタニを見て、優しく微笑む。
「初めて会ったばかりの貴方と僕ですが、僕は貴方がどういった方か、なんとなく分かります」
「え？」

「貴方も、なんとなく分かってませんか？」
「そ、それは確かに…。貴方が悪い人とは思いません。しかし…」
「それだけですか？」
「と、言いますと？」
「僕は、貴方が仮面作りをし過ぎて心を痛めている方に見えます」
「!!」
「貴方から見て僕は…なんでもお見通しのような気がしてませんか。それでいて信頼しても良いと思っている」
　また図星だ。もはや驚くことでもない気がする。
　信頼も確かに…俺を何か貶めるつもりなら、この場から離れることもしないし、サーナイトとイーブイが話をすることもない。
「方向性は違えど、同じ社会人同士。いつの間にか、人間を品定めするようになってしまって、そうすると、自分がどう見られているかを考えるようになって、それはそれは窮屈な一日を過ごすことになる…僕もそうでした」
「貴方も？」
「はい。ですが、サナリスが自分らしくて良いよと言ってくれてから、あまり仮面作りをしなくなりまして、それ以来人生が楽しくて仕方ない」
「……」
「最初に貴方を見た時、なんて自分に素直なのだろうと思いました。ですが、今は堪えている。我慢や無理は禁物ですよ。いずれ心が病んでしまう。どうかこれを」
　そう言って袋から食べ物を取り出す。それは誰もが見ても分かるサンドイッチだった。しかし、それはこの地域のものではないサンドイッチで、何やら少しパンの生地が硬い。
「これはパルデア地方というところから仕入れた食材達でして。ポケモンも食べることが出来ます。ガケガニスティックは特に絶品ですので、それを使った試作品のサンドイッチです。二つありますので、イーブイにも」
「…では……あっ」

イーブイがサナリスの膝の上で丸くなっていた。マツタニは手に持っていたサンドイッチを持ちながらキュンとする。
かっ、可愛いぃぃぃ…！なんという美！美しさと可愛さが備わっているではないか！暗くなかったら写真に収めていたところだ！
「サァナ。サナ」
「ブゥイ？ブイブイ！」
イーブイはサナリスの元を離れ、マツタニのところは駆け寄っていく。そして膝の上で座り、手に持っているそれの匂いを嗅いだ。
「…食べるか？」
「ブイ！」
小さい身体の割に大きく口を開けて、ガブッと中の具が顔を覗かせる。それを気にせずムシャムシャと食べてゴクンと飲み込むと、目を輝かせて、一気に食べる。
「こらこら、落ち着いて食べなさい」
「ムゥイ！」
「ふふっ。可愛いですね」
アンペルがそう言うと、マツタニはグッと右拳を握った。
「そうでしょう！この愛らしさは誰にも勝てない！貴方はよく分かっていらっ…あっ」
「良いですよその調子で。そもそも一度見てますし」
「あはは…」
マツタニは照れ臭そうに頬をカリカリする。
「いや、ね。どうしてもと言いますか、周りは私のことをエリートだと思っていて、感情も表に出さず、言われた業務を淡々と熟す男だと思われているんですよ」
「そうでしょうね」
「私はそれに応えないといけない。そう思ってしまうんです。それが周りの求めていることならば…と」
「ふふっ。やはり僕と貴方は似ている。僕もこの移動カフェを始めた時は、お客様が求める店員を演じようと必死でした」
アンペルは優しく微笑みながらそう言った。

「だからこそ、本当の自分を曝け出してみるのも良いと思います。貴方なら大丈夫だと思いますよ。僕が保証しましょう」
　この人に言われると、本当に大丈夫なような気がする…いや、大丈夫なんだろうな。今までやってきたことを全部変えることは出来ないが…それでも少しずつ変えていくことなら、出来る。
??????????????????????????やってみよう。心が病む前に。
「ところで美味しかったですか？サンドイッチ」
「ええ。とっても」
「ブイ！」
…よし。俺は覚悟を決めるぞ。我慢の方向性を変えてみたんだ。
俺は、今日！早く帰る!!
「マツタニ君！これ頼んだ！」
「すみませんが部長。今日は定時には帰らせていただきます」
「えっ」
　周りがざわっとする。マツタニが部長の頼み事を断ったのは初めてだからである。
「ど、どうしたんだ？体調でも悪いのか？」
「いいえ。ですが今日は家に帰らねばならない理由があるので」
「それはなんだ？適当な理由なら…」
「いやいやいや！部長！今日は僕らが残ります！」
「な、なに？だがこれは…」
「大丈夫ですよ！僕らマツタニさんの部下ですから!!」
「あ、ああ…まあそういうことなら」
　部下がマツタニにサムズアップする。マツタニはキョトンとしたが、その後少し口角を上げた。
「ありがとう。助かった」
「いえ！いつもお世話になってますから！」
「いつも助かってるのに、恩返しできないの、ほんとモヤモヤしてたんです」
「ところで、僕らには教えていただけませんか！定時に帰る理由！」

休憩時間にそう迫られ、マツタニはスマホを取り出した。
「私のポケモンが、家で待っているのでな。いつもは連れてきているのだが、今日はあえて我慢することにした。定時に帰る為に」
「と、なると…ヤルキモノ?ジュカイン?」
「いや、イーブイだ」
スマホの写真を見せる。それは、移動カフェ”安らぎ”の新商品、ガケガニサンドイッチを美味しく食べているイーブイの写真だった。
「か、かわええ…」
「だろう!?私の癒しなんだ」
「私、こういうのお嫌いなのかと…」
「大好きだぞ」
「意外な一面かも…!でも良いですねえそういうギャップ!」
ギャップ…そういう見方もできるのか。
クスッと笑う。みんなに打ち明けていなかったポケモンを初めて見せて、マツタニは少しだけ心が軽くなった気がした。
「申し訳ありません。ガケガニサンドイッチはもう品切れです…」
「え??????え〜!」
こんなに売れるとは…
サナ…
二人の移動カフェ”安らぎ”の営業はまだまだ続く。

第四話　気持ちを込めた手作り

カラカラと強い日差しの中、涼しい風が吹く。通称”海の都”と呼ばれるアルトマーレでは、夏になると毎年恒例の水上レースが行われる。

今大会では、その手の大会で名を残す人達が揃っており、その為に観光に訪れる人たちも溢れるほどいる。

水上をポケモンに引っ張ってもらい進むこのレースでは、いかにポケモンを信用して早く進めることが出来るかが鍵となっている。

ーーこの大会、絶対に勝ちたい。けど…

動きやすいように半袖短パンで、健康的な肉体美が目立つ、藍色の髪を頭の上に小さな団子のようにして結っている一人の女性が、大会の決勝前に自身の手首を見ていた。少し腫れている。

少し捻っただけだし大丈夫だと思うけど…これで私がミスをしたら、頑張ってくれたタマンタに申し訳ないわ。少しでも痛みを抑えないと…

アイシングをするものの、あまり効果がない。それでも続けている。

「タァマ」

「ん？平気よ。私は強いもの！」

「タァマン」

「知ってるって顔しちゃって。…あ、水分補給も忘れないようにしないと」

そう言って持ってきていた水筒を手に持つ。するとやはり少し痛みが走る。さりげなく左手に持ち替えて水を飲みはじめたその時だった。

「失礼します」

「えっ」

「先程のレースで痛めてましたよね？治療道具を持ってきたので使ってください」

その顔はこの夏になると必ず見る顔だった。

アンペルは救急箱を置きながら、隣に座る。
「僕が応急処置をしましょうか？」
「ええと…じゃあお願いします」
「では、失礼して…」
優しい手つきで丁寧に処置をしてくれる。そんな中、他愛無い話をしてくれた。
「マロンさんは昨年も出場してましたね。昨年は惜しくも準優勝でしたか」
「え、よく覚えてますね」
「サナリスがね、貴方のファンなんですよ」
「えっ」
「サナ!!」
サナリスが色紙を持ちながら待っていた。
私のことが好きって言うポケモンっているんだ。今まで興味なかったけど、もしかしたら他にもいるのかも。
「こらこら。サインはやめなさいって」
「いや、応急処置のお礼があるし、そういうことなら、サインします」
「！サナァ♪」
「ふふ、可愛い」
サナリスは深くお礼をする。するとタマンタとも目が合い、ニコッとお互い挨拶を交わす。
「タンマ」
「サナ！サァナ！」
「そうですね。頑張ってください、タマンタ。…はい、完了です」
マロンは右手を確認する。痛みは完全になくなったわけでは無いが、一回ぐらいは思いっきり動かしても支障は無さそうだった。
「ありがとうございます。では、そろそろ始まりますので、その後サインということで」
「はい。お気をつけて。サナリス、持ち場に戻りますよ」
「サナ」
するとサナリスと共にその場から姿を消した。

「ニレポート…」
彼が技を言う前にあのサナリスって子は技を使ったの？
「決勝戦を喫したのは、マロン選手だー！」
司会者の声と同時に頭を下げ、そして手を振る。お客さんの歓声がとても気持ちいい。
あ、そうだ。お礼しに行かないと。
そうしてマロンはアルトマーレを彷徨く。
「えーっと、あ、いた」
思った以上に早く見つかった。というのも、人気の高い移動カフェなだけあって長蛇の列だ。
「サナ」
「あら、サナリスちゃん。その看板は…あ、私でちょうど終わりなのね」
「サナサナ」
今はまだお昼をちょっと過ぎたあたり。閉店時間ではなく休憩時間ということだろう。
「いらっしゃいませ。ご注文は」
「じゃあ、アイスコーヒーで」
「かしこまりました」
そう言って先程作ったばかりのようである熱々のホットコーヒーを取り出した。そして、ＢＡＲとかにあるような大きくて少しゴツゴツした丸い氷の入ったコップの中に注いでいく。
ーーパキッパキッ！
急冷させることで氷が音を立てて割れる。それがさらに美味しさを引き立たせる。
マロンはごくりと唾を飲む。すっごい美味しそう。
「お待たせしました。どうぞ」
「いただきます」
「サナリスもお疲れ様でした。休憩にしましょう」
「サナ」

テーブルと椅子を取り出す。アンペルとサナリスはそこで食事をするようだった。
マロンはアイスコーヒーをごくっと飲む。
「美味しい…」
「それは良かった」
まるで先程までの疲れが抜けたかのような感覚に陥る。今からならまだまだ頑張れそうなそんな気持ちになる。
「サナァ！」
「あ、サインね」
「サァナ」
「ん？…これは、なに？」
「サッ」
「？」
サナリスは固まった。サナリスがマロンに渡したのは布で出来た何か。形が歪の四角形だが、よく見ると、蓋がある。
マロンはそれが小物入れであることが分かった。そしてしばらくして理解した。
「あ、ああっ!?プレゼント!?ごめん!!ごめんね!?」
「ふふっ…はっはっは！」
アンペルは大笑いをして、サナリスが赤く染めながらぷくーっと頬を膨らます。
ポカポカとアンペルを叩くけれども、アンペルは笑いを止めなかった。
「受け取ってください。サナリスは手先が不器用ですから歪過ぎて、小物入れには見えないかも知れませんが」
「いえ！素敵なものだと思います！」
「ええ。その通りです」
先程の笑い方とは違って、優しく包み込むような優しい笑みを浮かべる。そしてサナリスの頭を撫でながら、その落ち着きのある声で続けた。
「サナリスにはこだわりがありまして。基本的には超能力を使えば、

小物入れを作るのだって苦労はしません」
「え、超能力って凄い…」
「ええ。まあ、物を作るときにそんな使い方はしませんが」
「ですよね」
「はい。サナリスは〝気持ちを込めた〟物を作る時は、不器用ながらも一生懸命手作りで完成させるんですよ」
「……あっ、じゃあこれ…」
「はい。サナリスなりの愛情表現です」
　サナリスぷくっと未だに頬を膨らませながら、ジト目のような感じでマロンを見た。マロンがサナリスに近づくと、アンペルはそっとサナリス頭から手を離す。
「ありがとうサナリスちゃん。大切な物を作ってくれたんだね。宝物にするわ！」
「！サナァ♪」
　サナリスはマロンにも頭を撫でられて気持ちが昂揚する。
「では、僕から…いえ、僕たちからはこれを」
「これは…」
　海水のような清涼な青色をした宝石が装飾されたネックレスである。首にかける部分が少々不恰好だが、宝石の方は綺麗に研磨されており、その周りも綺麗に装飾されていた。
「アクアマリン、という宝石です。作らせていただきました」
「えっ!?」
「貴方にピッタリだろうとサナリスがいうものですから、僕のお気に入りの石から一つ」
「ちょ、ちょっと待ってください!?え、これって作れるんですか!?」
「そうですよ。天然石ジュエリーという物ですね。僕とサナリスの合作です。僕も〝気持ちを込めた〟物しか作りません。どうかこの小物入れに入れながら…布ですし高級感はありませんが」
「いえ、こんな素敵な贈り物…ありがとうございます！サナリスちゃんも！」
「サナッ！」

店主さんに影響を受けて、サナリスちゃんは手作りを始めたのかなとそう思ったマロンだった。
「あ??????? サイン！」
「サ??????ナァ」
「今??????日は手当もしてくれてありがとうございました」
「い??????えいえ」
夕方になってアンペル達の営業も終わり、明日にはここから立つその前に、マロンが挨拶にやってきた。
「店主さんみたいなしっかりした人に出会えて良かったね、サナリスちゃん！」
「サナ」
「あはは。僕はけっこう変な人ですけどね」
「そうですか？そんな風には見えないですけど」
「…知ってますか？こんな話」
「なんですか？」
『人と結婚したポケモンがいた。ポケモンと結婚した人がいた。昔は人もポケモンも同じだったから普通のことだった』」
「あ…なんか聞いたことがあるような」
「昔の話ですが、今結婚してる人がいたら流石に驚きますよね。当時はおそらくモンスターボールとかないでしょうが、今はありますし」
「え？ええ…そうですね。驚きますね」
「ふふっ。そうですよね。それではまたいつかめぐり逢いましょう」
そう言って左手を出す。マロンもつられて左手を出し握手を交わす。
右手、じゃあ無いんだ。確かコーヒーを出す手は右手だった気がするけど…
握手を交わした後、マロンは自分の部屋へと戻っていく。戻りながらモヤモヤしていた。
…なんであんな話を？サナリスちゃんと結婚してるって言いたかったのかな？いやいや、そんな突飛な話今時…

そう思った刹那、マロンはアンペルの左手の薬指に付けてあった指輪を思い出した。
緑に輝く宝石、ジェダイトという宝石が付いており、それはサナリスの左腕にもあった。
…あれ？確か店主さんの指輪…サイズこそピッタリだったけど、形は歪だった。サナリスちゃんの腕輪は凄い綺麗だったけど、あんなサナリスちゃんにぴったりな腕輪なんて多分どこのお店を探しても見つからない。だってポケモンの為に作る腕輪のお店なんて聞いたことがないもの。
……まさか…
『サナリスは”気持ちを込めた”物を作る時は、不器用ながらも一生懸命手作りで完成させるんですよ』
『僕も”気持ちを込めた”物しか作りません』
「あっ…なっ…え、えぇぇぇぇ!?!?」
マロンは思わず叫んだ。
「ふ??ふっ、今頃びっくりしてますかね」
「サ??サ??ナ??ナ」
サナリスは、ラルトス時代…アンペルがまだ幼かった頃からずっといる、最高で最愛の、”野生”のポケモンである。

第五話　好きは最強

ーーガタン！

車内に積んである物が軽く跳ねる。少し道路の整備が甘い場所を運転しているアンペルは後ろに聞こえるように少し大きめに声を出す。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい。大丈夫です」

赤いボブヘアーに、一眼レフを肩から下げている、色白でそばかすが特徴の女の子が後部座席でサナリスと一緒にいる。

「キッチンカーって、後部座席あるんですね」

「種類や、作り方によってあるのとないのがありますが、僕たちはありますね」

彼女の名前はマヒル。次の目的地に行くその直前、乗せて欲しいと言ってきた。

「乗り心地が悪いでしょうが、僕たちの移動先までなら付き合いますから」

「ありがとうございます。移動してくれるなら、それで」

「……目的地はないんですか？」

「…はい」

「そうですか」

まだお日様が顔を出したばかりで、展開する目的地までにはまだまだ時間がかかる。

「少し、休憩にしましょうか」

「あ、はい」

アンペル達はテーブルと椅子を置いて、マヒルをそこに誘う。マヒルが座ると、フルーツサンドイッチと、紅茶を用意した。

「モモンのみをメインとしたサンドイッチです。モモンのみはそれだけで甘いので、身体に悪い砂糖のような物は一切入れておりません。朝にはピッタリです」

「そんな、悪いです。ただでさえ無理させてるのに」

「無理してませんよ。どうぞ」
「…では、いただきます」
　マヒルは一口食べる。ジュワッと果実が口の中に広がりながらもしつこくなく食べやすい。
「…美味しい」
「それは良かった。…やっと少し笑ってくれましたね」
「え？」
「失礼。今日乗せて欲しいと仰った時からすでに、顔がこわばっていたものですから」
　そう言ってもう一つの椅子に腰を下ろし、姿勢を正しながらマヒルを見た。
「無理をしているのは、貴方の方ではありませんか？」
　マヒルはワンテンポ遅れてから、
「そんなことありません」
　と言った。
「そうですか」
「はい」

「ヒナタおにい！マヒルおねぇ見てない!?」
「コイズミ？いや、見てないけど…ってサイオンジ！なんだその服装は！着付けの仕方は教えてもらったんだろ！」
「し、仕方ないでしょ！おねぇに教えてもらったけど、今までずっとやってもらってたし…まだ一人じゃ上手くできないの!!」
「にしたってヨレヨレすぎだろ！」
　舞踏家の服装だが、ちゃんと着付けがなってない小さな女の子のサイオンジ。ネクタイと白い制服、髪のアンテナが目立つヒナタ。ヒナタが外に出てすぐにサイオンジに捕まっていた。
　そこにパーカーを着て、ウサギのようなヘアピンをつけた女の子もやってくる。
「二人ともどうしたの？」
「ああ、ナナミ。コイズミを見なかったか？サイオンジが探してるん

だけど…」
「うーん見なかった…と思うよ？何かあったの？」
「サイオンジがな？着付けをして欲しいのにいないからって…」
「あ、ごめんそうじゃなくて」
「ん？」
「サイオンジさん、コイズミさんと何かあったの？」
「えっ!?」
　図星なのか、ビクッと後ろに一歩下がる。「そうなのか？」とヒナタも聞く。
「あ、あんたらにはカンケーないじゃん！」
「関係なくはないだろ。同じマスターハイスクールなわけだし」
「そうそう。それに私は委員長として、仲が悪いところは見たくないのです。だから話すべき…と、思うよ？」
「うぐっ……」
「ははあ。さてはサイオンジ、自分がコイズミに対して酷いことを言ったかなんかしたんだろ？だから言いづらいんだろ？」
「違う！わたしは悪くないもん！」
「どうだか。嫌いなら昔の、まだ仲良くなかった時みたいに〝コイズミ〟おねぇって言うだろうに、今だに〝マヒル〟おねぇだもんな」
「大好きだもん！当たり前でしょ！」
「じゃあ素直になれって。お前が悪いんだろ？」
「だから違うっ！悪いのはあんたっーーもういい！」
　サイオンジはモンスターボールを取り出した。
「ホォォオ！」
「ムクホーク！マヒルおねぇ探すから手伝って！」
「お、おいサイオンジ」
「べぇーっだ！役立たず！地味アンテナ！」
　サイオンジはヒナタにそう言って空へと飛んでいった。ヒナタはポカンとしている。
「ヒナタくん、何かしたの？」
「……まったく心当たりがない」

「でもヒナタくんが悪いって」
「なんなんだ…ああくそ！ウインディ出てこい！」
　ヒナタはウインディの上に乗る。
「なんかよく分からないけど、コイズミが行方不明になってるなら探すのが良いよな！」
「うん。いい判断…だと思うよ。じゃあ私は、近くにいるかも知れないし…この辺りを聞き込みしてみるね。何か分かったらスマホロトムに連絡入れるから」
「ああ、頼んだ！」
　そう言ってヒナタは走り出した。ナナミはそこでハッと気づく。
「そうだ。まず初めにコイズミさんに電話するところから」

　マヒルは食事を終えるとキチンと顔を拭いた。ごちそうさまでしたと一言言うと、サッと食器を片付け始めようとした。
「片付けはしますよ」
「そんな。ご迷惑をおかけしてますし…」
「迷惑ではありません。お客様…ではないけれど、人の笑顔を見ることが出来た。僕にとってそれは至福ですから」
　優しげに微笑む。
　ーーなんか調子狂っちゃうわ。ダメ親父に比べてしっかりし過ぎてて…男って変な人ばっかだと思ってたけど、こんな人もいるんだ。
　…いやいるのは知ってる、けど…
　脳裏に浮かぶ相手は…マヒルの写真を褒めてくれた男。
「サナ」
「きゃっ。なに？サナリスちゃん」
「サァナ」
　マヒルの服越しにスマホロトムの画面が光る。マヒルは慌てて画面を表示すると、すぐにポケットにしまった。
「…出ないと逆に問題になるかも知れませんよ」
「えっ？」
「おそらくですが、何も言わずに遠出しているのでしょう？」

そう言われて、マヒルはコクッと静かに頷いた。
「貴方は清楚な服装で、カメラも丁寧に手入れされている。さらに言うと気遣いも出来る。『私生活において隙がない方』です。そういった方は周りから”頼れる人”、”大切な人”と思われます。そんな方が何も言わずに出て行ったとなれば、みんな探すでしょう。出来るだけ遠くへ…でしたよね？ならば心配しないでとお伝えした方が、より遠くへ行けるかと」
その通りだ。確かにアタシは遠くへ行きたい。そう思い切って飛び出した。アタシらしくもない、最低限の物だけ持って行って。
アタシは折り返した。
「ごめん、チアキちゃん。さっきは電話に出れなくて」
『ううん。大丈夫だよ。ところで今どこにいるの？サイオンジさんが探してたよ？』
「そっか。ごめんね。ちょっと散歩してるだけだから。今は夏休みだしね。夕方までには帰るから、ヒヨコちゃんにも伝えといて…ね」
『そっか。分かった。サイオンジさん…あ、そうだった。ヒナタくんも探すって言ってどっか行っちゃったから、ヒナタくんにも連絡しとくね』
「え？ヒナタが？」
『うん。行方不明なら探した方がいいよなって。ヒナタくんもサイオンジさんも、コイズミさんのことが大切なんだ…と、思うよ』
マヒルは少し固まる。
ヒナタが…アタシを……大切って…
いやいや違う。そう言う意味じゃない。だってアイツの大切な人は…
『コイズミさん？』
「……あ！ごめん！ちょっとぼーっとしてた！」
『大丈夫？』
「大丈夫大丈夫。ごめんね」
『ううん。じゃあ夕方まで待ってるから。あと…』
「なに？」

『深くは聞かないけど…サイオンジさんの電話にも出てあげてね』
「っ!!」
『それじゃあ』
電話が切れる。ツーツーと音が鳴り終えるまでマヒルは一言も喋らなかった。
ーーさすがチアキちゃん。ヒヨコちゃんが電話に出ないなんて言わないだろうし、推測したんだ。それを確信めいたように…
いや、確信したんだろうな。アタシの声色とかで判断して…
マヒルの表情が暗くなる。アンペルはそれを見てサナリスとアイコンタクトを交わす。
「では、遠くへ行きましょうか」
「えっ」
「夕方に本当に帰るのか否か…それは貴方次第です。僕はそのお付き合いなら全然いいですよ」
「あっ…ありがとうございます」

「本当?コマエダくん」
ナナミがそう聞いた相手は、深緑に後ろには赤の紋様が入ったパーカーを着た、白い癖っ毛の男だった。
「うん。ボクが今日たまたま散歩してたら会ったよ。コイズミさんに。あっちの方角だから…アラモスタウンかな」
「その方角なら、一番近いのはそうなるね。それでも車とか、ポケモンの力を借りないと、夕方には帰れそうにないけど」
「そうだね。コイズミさんのポケモンはニャルマーだし…そうなると、昨日までここにいた移動カフェの人の車に乗せてもらったとかかな」
「ああそういえばいたね。昨日の夜に車を移動させてたからもうどっかに行っちゃったと思ってたけど」
「ボクも昨日まではそう思ってたけど、たまたまコイズミさんの前に見てるんだよね。サーナイトと食事してたよ」
「じゃあ可能性高いね。さすがコマエダくん」

「ナナミさんの力になれるたなんて光栄だなあ！ボクのゴミみたいな才能も役に立ったならこれ以上嬉しいことはないよ！」
　自分自身を過小評価しながら相手を褒めちぎるコマエダを横目に、サイオンジ達に連絡を入れる。
「これで問題ない…かな」
　連絡をすぐに確認するのはヒナタ。走っている先が思いっきり正反対の方角であることに驚愕する。
「おーいサイオンジ！」
「なんだヒナタおにぃ！追いかけてくんな！」
「コマエダがコイズミを見たんだって！」
「え!?」
「方角が逆だ！アラモスタウンの方へ行くぞ！移動カフェの人と一緒にいる可能性が高いって！」
「昨日までいた”安らぎ”ってとこの!?」
「多分それ！」
「マヒルおねぇ…」
　少し俯く。こういう時、自分の口下手が嫌いだ。もっとマヒルおねぇの気持ちを考えないといけなかったのに。
「ヒナタおにぃありがとう！後はわたしだけでいいから！ムクホーク、お願い。マヒルおねぇのとこに行って」
　少し鳴いて、ムクホークは逆方向へ軌道を変え走り出す。風でヨレヨレの服が靡く。
「きゃっ！」
「わっ、おい！服！気をつけろよぉおお！」
「うっさいエロアンテナ!!」
「えぇ…」

「アラモスタウン…ここが」
「来るのは初めてですか？」
「そうですね。なんだかんだ遠いところで、ニャルマーしか持ってないですから」

「ああ…確かに、車や、ライド出来るポケモンとかでないとあそこからはキツイですね」
　時空の塔と呼ばれる、このタウンの一番の観光地がマヒルの首を疲れさせる。
　たっか…公園とかもあるし、観光地としても有名なだけある。
「さて、営業を始めるまでまだ時間がありますし、お話でもしますか」
「お話…ですか？」
「はい。そうですね…どんな写真を撮られるんですか？」
「えーっと、基本的には人物写真とポケモンの写真です。一番好きで、一番得意…です」
「お見せしてもらうことは可能ですか？」
「え？」
　ドクンと心臓が鳴る。
　ーーいや、何を躊躇ってるんだアタシは。この人はきっと褒めてくれる。アタシの一番だと思う才能を…この人なら。
　そう思う気持ちとは裏腹に手は震える。
「ど、どうぞ……えっ」
　それをサナリスが制す。フルフルと首を振ってマヒルの両手をサナリスの冷たくも温かい両手が包む。
「サナリスは人の感情に敏感ですからね。貴方の心に触れてしまったのでしょう」
「サナリスちゃん」
「サァナ」
「ふむ…」
　アンペルはちょっと失礼と一言言ってからスマホを取り出し、何かを調べ始めた。
「……これは失礼しました。貴方は、有名な方なんですね」
「っ！」
「マスターボール級と呼ばれる様々な才能を持つ者を勧誘する”マスターハイスクール”に入学している方の一人…写真家…ですか」
　マヒルは顔を下に向ける。自然と自分のスカートを強く掴んでい

た。心臓がバクバクと鳴る。
「……写真は好きですか？」
「えっ」
「写真を撮るのは好き…ですか？」
その時、マヒルは困惑した。変な質問をしてきたからではない。
ーーなんでアタシ、答えるの躊躇ってるの？アタシはもう写真が好きじゃない……ってこと？
「……わかり、ません」
そう答えるや否やすぐに手で口元を隠した。昔ならすぐに「好き」と言えたのだろうに。
一体どこでアタシはこの好きを捨ててきたのかな。
「分かります。その気持ち」
「…え？」
「僕も好きなことをしてるだけで、それを共有してるだけで日々叩かれてますよ」
笑いながらそう言って見せる。アンペルは喋りながら作っていたソクノ茶をマヒルに渡した後空を眺める。
「そういう時、どこが正しい道で、どこが間違った道なのか、分からなくなる。そうこうしているうちに何かを落とした気になる。その最中、喧嘩とかすると余計に…自分を見失う」
「!!」
マヒルはサイオンジと昨日話したことを思い出す。ネットの声に敏感になって、ネガティブなことを考えるようになって、スランプに陥っていたアタシに対して、ヒヨコちゃんは気にせずアタシに我儘ばっかり言ってきた。
『おねぇ！着付けお願い！』
『ちょっとヒヨコちゃん、そろそろ自分一人で出来るようになりなさいよ。鏡を見れば出来るでしょ？』
『やだやだやだ！おねぇにしてもらいたいの！』
『もう、わがままばっかり。そんなんじゃいつまで経っても出来ないわよ』

『おねぇがいるなら大丈夫じゃない？』
『…あのねヒヨコちゃん。アタシはいつまでもヒヨコちゃんのルームメイトじゃないのよ？卒業したら離れ離れになるでしょ。今のうちに出来るようになっときなさい』
女の子に対してアタシはそこまで怒らないけど、色々が重なってたから、ヒヨコちゃんに対してちょっときつい態度になっていた。
『おねぇ、どうしたの？嫌なことでもあったの？』
『別に』
『分かった！ヒナタおにいでしょ！』
『は、はぁ!?』
アタシは思わず動揺してしまった。
ネットの声より、ヒナタの声が聞きたかった。ヒナタの感想が、アタシは欲しかった。
アタシの写真を”好き”って言ってくれるアイツの顔を、見たいって思ってた。だからそれを言われた気がして、思わず大きな声を出した。
『やっぱりねえ。おねぇはしっかりしてそうで、恋愛事は消極的だもんねえ？』
『う、うるさい！』
『でもナナミおねぇのことが好きだもんなあ』
『っ…』
うん、知ってる。アイツはチアキちゃんのことが好きだってことぐらい。見てきたから知ってるわよ、そんなこと。
『…着付け、するわよ』
『え…あ、おねぇ、ごめん。そんなに気にしてるなんて思ってなかった』
その時のアタシは涙を堪えるのに必死だったけど、口を震わせながらだけど、喋ってみせた。
『何が？アタシは別にアイツに好かれたいわけじゃないもの。っていうかアタシみたいな口うるさいやつ、大切な人として見てもらえるわけないじゃない。アタシはさ、写真しか取り柄がないんだよ。だから

大切にされなくてもいいから、アタシの写真を褒めて欲しいだけ。アイツに見てもらいたかっただけなんだよ』
『じゃ、じゃあ今からでも見に行ってもらおうよ！そうしたらいいじゃん！何怖がってるの！』
見たくないんだよ。チアキちゃんとヒナタが一緒にいるところ。お似合いだなってどうしようもなく思っちゃうから。助け合いながら、一緒にゲームしながらチアキちゃんを見るヒナタの顔が…
アタシが今一番撮りたい写真なんだもの。でもその表情は横顔じゃなくて…
正面がいいんだよ。
それを撮って、見て欲しいんだよ。アタシが思う最高の一枚をアイツにだけ見せたい。
そんなの叶うわけがないのに。
『はい。終わり。じゃあアタシ用事があるから』
『お、おねぇ』
『ヒヨコちゃんはさ、ちょっと周りを見た方がいいわよ』
その言葉を最後に、次の日朝早くに起きてヒヨコちゃんから離れた。
別に家出ってわけじゃない。ヒヨコちゃんと話してるとまたドス黒い感情が出てきそうで怖いから、話したくないだけ。あそこにいると、話すことになるから。
そんな今のアタシが良い写真なんて、撮れるわけないのに。
「アタシ、どうしたらいいんでしょうか。どうしたら、みんなに認めてもらえるんでしょうか」
「それは無理じゃないですか？」
即答。同じ境遇になったことがある人から、否定された。でもその言葉になんでか知らないけど興味を示してしまった。
「僕は今でも批判されます。でも、今は楽しいですよ。そういうのも楽しめるようになりました」
「どうして？」
「好きなんだって、再認識出来たからです」

「好き…？」
「料理、ハンドメイド…それで救われる人の笑顔。僕はそれが好きなんです。それを忘れていた…というより要らないものが貼り付いてきていた」
　そう言うと、アンペルはたくさんの紙が張り付いているそれなりに大きなゴミのような玉を取り出した。
「苦しい、きつい、大変、評価……」
　一単語につき一枚紙を剥がしていく。ネガティブと捉えれる感情や、世間。それらを剥がしていくと、少しずつ玉が小さくなっていく。
「こうやって一枚ずつ自分の”やっていること”に対して不要なものを剥がしていくんです。そうやって全部剥がしたら、こうやって”原点”が見える」
　赤く透き通った宝石。燃えるようなその色合い、ガーネットと呼ばれる宝石である。
「僕には”情熱”がある。それは誰にも奪うことはできない。なぜなら僕はこの仕事が”好き”だから」
「…！」
「だから貴方も”好き”だと思いますよ。今は迷ってるだけで、いつか好きを取り戻せる。貴方にその気持ちがあるのなら、絶対に」
　そう言ってガーネットをマヒルに渡す。マヒルはそれをギュッと握りしめて胸のところまで持っていく。
　ーーアタシは弱い。気が強いふりして凄い弱いけど、それでもアタシにだって写真を撮りたいっていう”気持ち”がある。
　それはきっと好きだからなんだと思う。
　サナリスがアンペルと目を合わせる。それを見て、クスッと笑う。
「凄い普通のことですが、良い言葉をお伝えしますね」
「え？」
「好きは最強の感情です。一度思い切って周りのことなんて気にせずにやりたいことをしてみては？」
「それは…ちょっと怖い、かも」
「そうですか？ですが見本となれるような人はいるみたいですよ？」

「えっ？」
　サナリスがマヒルの肩をポンと叩き、空を指差す。マヒルはその方向へ顔を上げると、見知った顔が全速力でやってきているのが分かった。
「おねぇ～!!!」
「ヒヨコちゃん!?!?」
「おねぇを誑かす悪い奴らめ！わたしが成敗してやる！」
「おっと、そうなりますか」
「待って待って！ヒヨコちゃん違うの！」
「何が!!こいつら、おねぇの様子を見て連れ去ったんでしょ!!誘拐犯は成敗するべき!!」
「アタシが！お願いしたの！ヒヨコちゃんと話したくなかったから!!」
「っ…!!」
　マヒルの正直な言葉に、ヒヨコは覚悟をしてはいたようだが固まった。次第にぷるぷると身体を震わせて、いかにも泣き出しそうな表情だ。
「わ、わたし、おねぇに嫌われた…？」
「その考え方はピンボケだよ」
　マヒルはヒヨコを抱きしめる。
　ーーなんだろう。会いたくないと思ってたけど、いざ会ってみたら心が落ち着く。嬉しい気持ちになる。
「ごめんね。ヒヨコちゃん」
「ふぇ…？」
「ヒヨコちゃんは今のままでもいい。アタシのことをずっと好きでいて。アタシも…ヒヨコちゃんが好きだから」
「!!」
「ヒヨコちゃんよりアタシの方がよっぽど子供だった。アタシも自分と向き合わなきゃね」
「う、うわぁーん!!おねぇ！おねぇえええ!!」
　ヒヨコの不恰好な姿をしっかりと直して、一枚写真を撮る。ヒヨコ

の泣きじゃくった跡がしっかりと残っていて不細工だった。だがそこには笑顔もあり、綺麗な一枚になっていて、マヒルにとって手応えがあるように思えた。
「これ、どうですか」
「どれどれ…ほう、見事なまでに涙の跡がくっきりと」
「うわぁあ！見るなこの変態！」
「こらヒヨコちゃん！アンペルさんに失礼でしょ！」
「あはは。すみません、僕はこういう自然な一枚の写真、大好きですよ」
「！ありがとうございます!!」
　変なことを、嫌なことを考えるのはもうやめよう。ヒヨコちゃんみたいにたまには、わがままを言ってみよう。好きをもっと全面に出してみよう。そしたら、アンペルさんみたいに見てくれる人は見てくれる。
「あ??????りがとうございました！またいつか！」
「は??????い。いつかまた、めぐり逢いましょう」
「あ??????帰ってきた」
「う??????ん。良かったね」
　ヒナタとナナミが二人の帰りを待っていた。ムクホークから降りて??????ヒヨコを抱きしめながら降ろすマヒルを見て、ヒナタはぷはっと笑う。
「サイオンジ、まるでコイズミの子供みたいだな」
　そう言ったヒナタを見て、マヒルは少し深呼吸をした後、一歩前に出る。
「ヒヨコちゃんがアタシの子供なら、アタシの夫は誰になるのかしらね」
「え？」
　じっと真剣な眼差しでヒナタを見るマヒルに、ヒナタは何故か緊張して、もごもごする。
「…あはは！何よその反応！」

「なっ！お前が変な質問してくるからだろ！」
「いやー面白い顔が見れたわ！」
マヒルはヒナタとナナミの前を通り過ぎて、くるっと振り返って二人の写真をパシャっと撮る。
「アタシ、魅力をどんどん上げていくから！シャッターチャンスは逃さないでね！チアキちゃん、アタシ負けないからね！」
「あーっ！待ってよおねぇー!!」
何か吹っ切れたように走り出す。ナナミはヒナタを見てちょっと顔を膨らます。
「照れてる」
「いや…そんなことは……」
「うーん、ヒナタくんは結構奥手だもんなあ…」
ボソッとそう呟きながらナナミもマヒルの方へと歩き出した。
「おい、ナナミ今なんて言ったんだ？」
「コイズミさんは強敵って言った」

第六話　頭脳戦

ポケモングランドハイスクール！それは１５歳になる年に入学出来るスクールである。
そしてここは、富豪名家に生まれ、将来国を背負うであろう者たちが大勢入学している。
そんな彼らを率い纏め上げる者が、凡人であるなど許される筈もない！
そこの生徒会長と、副生徒会長は、代々優秀な人材が務めていた。そして今現在も変わらず、スクール内では”理想の生徒会”と評価されているほどである。
「噂されているようですね」
リボンで髪をポニーテールに結っている副会長、カグヤ。シノミヤグループという四大財閥の一つの娘であり、その血筋の優秀さを語るが如く、芸事、音楽、武芸どの分野でも華々しい功績を残している『天才』
「そういうお年頃なのだろう。聞き流せばいい」
金髪で寝不足なのかクマが目立つ目つきの悪い青年、ミユキ！
質実剛健、聡明英知。スクール模試は不動の一位！全国の天才達と頂点を争うレベルの猛者！
多才であるカグヤとは対照的に、勉学一本で畏怖と敬意を集めた男。生徒会長に受け継がれる由緒ある純金飾緒の重みは、彼が背負っている！
「そういうものですか」
噂というのは、二人が付き合っているという噂。実際二人は付き合っているということはなく、ただの会長と副会長という関係である。
ーーふん。俺とシノミヤが付き合っているだと？くだらん色恋話に華を咲かせおって。愚かな連中だ。
が、まあ…
シノミヤがどうしても付き合ってくれというなら、考えてやらんこ

ともないがな!!
ミユキは以前、『見逃しがちな女のラブサイン特集』という記事を読んだことがあり、そこには『自分たちが周囲に噂されている話をする』という内容が書かれてあった。
ーーまあ、向こうは俺に気があるだろうし、時間の問題か。くく…さっさとその完璧なお嬢様の仮面を外し、赤面しながら俺に告白をしてくるがいいさ。
不気味に笑うミユキの後ろではカグヤがトレイを片付けていた。
ーー全く。下世話な愚民ども。この私を誰だと思っているの?どうすれば私と平民が付き合うなんて発想に至るのかしら。
まぁ、
会長にギリのギリギリ可能性があるのは確かだけど。
向こうが跪き身も心も故郷も捧げるというのなら、この私に見合う男に鍛えてあげなくもないけれど…
まあこの私に恋焦がれない男なんていないわけだし?時間の問題かしら。
「くくく…」
「ふふふ…」
などとやっているうちに、
半年が過ぎた!!
その間、特に何もなかった!!
このなんもない期間の間に、二人の思考は『付き合ってやってもいい』から、『いかに相手に告白させるか』という思考にシフトしていた!!

生徒総会が終わり夏休みが始まる。しかし夏休みとは何もしなければそのまま終わる。
クラスの友達に会うことはもちろん、生徒会のメンバー…つまるところカグヤと会うこともない。
「生徒会のみんなで思い出作りたいですよねー」
しかしそれは書記担当の何気ない言葉に救われる。全員のスケ

ジュールの確保を終え、さあ思い出作りへ…そう思っていたが。
「生徒会があまりに忙しく、ポケモンと戯れることもありませんでしたし、皆さんポケモンも連れてきてはどうですか」
カグヤの言葉がミユキを襲いかかる…！
「会長のポケモンは一度も見たことないですし…」
「俺のポケモンは珍しくてな、周りからそんな目で見られるのは好かん。ポケモンには申し訳ないが連れて行く気はない」
嘘である。この男、勉学一本でやってきた分、ポケモンを一匹も持っていないのである。
小さい頃からポケモンを持つことに憧れていたが、家庭的にポケモンを養うことが難しく、しかしそんなことは言えないため、バイトをしていない時代から珍しいポケモンを持っていると嘘と見栄を張り続けてきた。
そしてバイトが始まったら始まったでポケモンを捕まえに行く時間もなくなる。勉強＆バイトでミユキの時間の大半は潰されていた！
ーーしかし、ポケモンを持っていないことがシノミヤにバレても見ろ！そんな事態になったら…
『あら、会長。珍しいポケモンを持っているというのは嘘だったんですか？あら、子供の頃から嘘を…？』
『お可愛いこと』
ーーってなるじゃないか！
だから拒否！断固拒否！
「でも、僕もせっかくなら会長と、そして会長のポケモンと僕のポケモンと遊びたいです…」
会計担当の男、片目が隠れてヘッドホンを首にかけているユウが、そう呟く。
「僕は一年で、会長達は二年ですし…来年は遊べるかどうか分かりませんから…」
ーーや、やめろイシガミ。そういうことを言われると断りにくいじゃないか…!!

「そうですよ会長。せっかくです。会長のポケモンさんも、皆さんと思い出を作りたいと思ってるんじゃないですか？」
カグヤによる畳み掛け。イシガミからの願いもあり、八方塞がり。
結局その場では行くと言う他なかった。
ーー今からすぐにポケモンを捕まえればいいだけの話。捕まえれば…
珍しいポケモンってそんなすぐに捕まえられるのか？
ミユキは森へ出てすぐにそこに気づいた。
ーーいや！色違いなら見つけることが出来る可能性がある！通常色とは違うポケモンは誰がどう見ても珍しいからな。なに、今日一日、いや、みんなと会うまでに捕まえることができれば問題ない。
「どうされました？」
森の中で声をかけられ、少し驚くミユキ。
「おや、驚かせてすみません。僕の名前はアンペル。あちらに止めてある移動カフェの店主です」
「移動…カフェ？」
「ええ。明日からそちらの道を出てすぐの街でしばらく滞在するので」
「そうですか。いや見苦しいところを見せてすみません。実はポケモンを探してまして」
「貴方のですか？」
「いえ、僕は持っていなくて。今から捕まえようと…」
「サァナ」
「!?色違いの…サーナイト！」
サナリスがヒョコッとアンペルの後ろから顔を出す。
腕輪をつけているということは、この人のポケモンか…野生ならと思ったがこの辺りにサーナイトはいないはずだし当然か…
他を探すしかあるまい…そうでないとシノミヤになんと言われるか…
「サナ、サナサナ」
「うーん…訳ありですか」

サナリスとアンペルが話をしているのを見て、少し驚くミユキ。
ポケモンと人が話をしている時は、可愛がっている時などだが、こんなに自然とまるで人同士で話しているところを見るのは初めてだからだ。
しばらくしてアンペルがミユキを見る。
「約束してください。サナリス…僕のサーナイトですが、必ず返すと」
「え？」
「それを守ってくれるのであれば、モンスターボールで捕まえても構いません」
「は!?」
「見せたい人がいるんでしょう？サナリスは珍しいですからね。さぞ喜んでいただけるかと」
まるで心の中を読んでいるかのようにアンペルはそう言った。
「いや、しかし…すでに捕まえられているポケモンを捕まえるなど…」
「僕のサナリスは、モンスターボールで捕まえていません。ですから、僕のではありますが、野生のポケモンですよ」
「えっ…」
「だから貴方が返してくれなかったらサナリスは一生貴方のまま。ですから約束をして欲しいのです」
「…どうして僕にそこまで」
「どうしてでしょうか。貴方なら信頼できるからでしょうかね。それと、好きな人に対しては見栄を張りたいというのも分かります」
「ぐっ」
俺…一言も好きな人とか言っていないのに…
やはり心が読まれている気がする。
「後…サナリスはこの手の話が大好物ですので」
「サナ！」
「は、はぁ…」
「どのみち、そう簡単に色違いなんて見つかりませんし、貴方が約束してくれるのであれば、構いませんよ。ただ…」
ずいっとミユキの顔に近づく。

「恥ずかしい一面を見せても、おそらく大丈夫でしょう。貴方のような努力家ならば」
「えっ、どうして…」
「見れば分かりますよ。手のタコに、目のクマ…。姿勢も綺麗ですし…それから…代々受け継がれているこれを身につけている方、ですからね」
そう言ってミユキの学ランの襟部分についてある純金を指差した。
「え、貴方はグランドハイスクールの…」
「卒業生です。生徒会には入ってませんがね。さて、貴方にサナリスをお貸ししてもいいですが、いつがいいですか？」
優しく微笑むアンペル。
ーーなんという、心を落ち着かせる人だ。そして後輩想い。これは先輩の気持ちをしっかりと受け取るべきだろう。
ミユキは決心し、サナリスを借りることにした。
「じゃあ…この日で」
「分かりました。ではその日に」
「約束は必ず守ります」
「ええ。わかっています」
「あと…」
「ふっ…」
生徒会メンバーが集まる当日。その日は夏祭りがあった。それも大きな花火が撮れるという大規模な祭りである。
日中で、まだ始まるちょっと前ながらすでに沢山の人がポケモンを連れて祭りの雰囲気を楽しんでいる。
一人でに笑っていたのはカグヤだった。
ーー会長がポケモンを所持していないのはハヤサカの調べで把握済み。
そう、彼女はすでに知っていたのである！知っていてなお知らないふりをしていた理由、それは…ポケモンを渡すため!!
ーー会長が待ち合わせ時間になっても来ないのは、ポケモンを連れ

て来なかった理由を考えているのでしょう。
そこで！私がフォローをする！
『会長、こちらへ』
『シ、シノミヤ？』
『これを…』
『これは、まさか…』
『もしやと思い、会長の為にポケモンを用意しました。このことは秘密にしてあげます』
『シノミヤ…すまない。ずっと憧れだったんだ…』
『会長…』
『シノミヤ、お前は本当に俺の支えになってくれている。俺は、そんなシノミヤが…』
「ふふふふふ」
「なにあれ、怖いんですけど…」
イシガミがそんな不気味なカグヤを見て慄いている。
完璧なプランだわ！これで会長も思わず告白してくるに違いない！
「すまん、遅れた」
「会長、遅いですよ。集合時間の１０分前には…」
「サナ」
ミユキの隣にはサナリスがいる。サナリスはモンスターボールから出ている…というのではなく、ミユキは結局モンスターボールを使わず、野生のまま連れていくことにしたのだ。
そんなことは知らないカグヤ。
ーーなんでポケモンを連れてきてるのよー!!
ご乱心だった！
ーーどうなってるのよハヤサカぁー！
「とか思われてるんでしょうね」
「とか思われてますね」
金髪の長い髪を横に束ねていて、カグヤが最も信頼し大好きな従者、ハヤサカが、ブレンドを頂きながらアンペルと話していた。

「私はポケモンを持っているか否かの確認をされただけなので、シロガネさんの『捕まえない』という選択肢は素晴らしかったです。捕まえてないということは、持っていないというのと同義ですし」
「モノはいいようですね」
「…それにしても、来てるなら連絡ぐらいくれても良かったじゃないですか」
「貴方こそ、僕が来ているのを確認するなんてことはせずに、お母様にあまーー」
「それ以上はいけません」
クールで淡々と話しているのにも関わらず、アンペルの口を両手で塞ぐ。少し顔を赤らめているその様子を見てアンペルはニコりとしながら頷いた。
「まあ何はともあれ、どうなるか楽しみですけどね」
何気ない普通の会話。祭りを楽しもうとしている彼らは心中穏やかではなかった。
書記とイシガミは別に楽しんでいるが。
ーーなんで会長はポケモンを持っているのよ！ハヤサカの調べだと持ってないんじゃなかったの!?これじゃあ作戦が台無しじゃない！
「か、会長、そちらのポケモンは…」
「サーナイトだ。俺のポケモンでな。見ての通り色違いだし、ギリギリまで迷っていたら遅れてしまった。本当にすまなかった」
「い、いえ」
サーナイト…サーナイトねえ。ここら辺では見かけることが無いはずですけど、いつどこで出会ったというのかしら。
それに、なんか、こう…
サナリスの両隣はミユキとカグヤ。カグヤにミユキの隣は行かせまいというように邪魔をしている。
ーーいいえ。気のせいよ。さすがにポケモンにそんな知性がある わけ…
サナリスはそのタイミングでミユキと恋人繋ぎをしてみせた。

ピシッーー
「サナ♪」
カグヤの心にヒビが入る。明らか狙っているのことが分かったからだ。
ーー小悪魔。色違いだからって調子に乗る典型的なゴミ。家畜の方がお似合いよ。
サナリスはクスクスと笑う。ミユキは「どうした?」というが気にしないでというように首を振る。するとミユキも軽く微笑みながら「そうか」と呟く。
ーー何よデレデレしちゃって!!ポケモンに恋でもしてるの!?むぅうううう!!これいつになったら…
ってああもう!これじゃあ私がまるで会長にポケモンをプレゼントしたいみたいじゃない!!
「サァナ」
「え?」
サナリスはカグヤがひっそりと持っていたモンスターボールをスッととって見せた。超能力を使ってぷかぷかと浮いている。
「ちょ、ちょっと!」
「ん?どうしたサーナイト」
「か、会長!これはですね、あの……」
「何かあったのか?」
ミユキはモンスターボールすら見えていなかった。…のではない!サナリスがミユキの視界には映らないように動いていたのだ!
ーーき、気づいていない?こんな近くにいて?そんなことはありえな…
サナリスがそこでウインクをする。そしてモンスターボールを開けた。
「ブイ!」
「イーブイ?…ちょ、うぉ、なんだこのイーブイ!」
「あれ、会長ー!会長その可愛いサーナイトちゃんの他にもポケモンを持ってたんですかー!?」

「へえ、肩の上に乗るなんて、すごい懐いてるじゃないですか」
「え!?あ、これはなあ!?」
先陣きって歩いていた二人も気づき、ミユキの手持ちと勘違いをしている。ミユキはそこで気づく。これはカグヤのポケモンだということに。
しかしカグヤはポーカーフェイスを保ったままだった。
「可愛いですね。そのイーブイも色違いじゃないですか」
「ん!?あ、ああ」
「サナサナ」
ーーこの子なんて健気なの!ほんと可愛いわねサーナイトちゃん!
カグヤは手のひら返しの天才だった。
ーーこのイーブイは野生…なのか!?まさか、俺の魅力に気づいて!?
※違う。
とにかくここはなんとか誤魔化さないとな。
「ああ。まあな、ついてきたみたいだなはっはっは!」
「ふふ、ダメですよ会長。せっかくのお祭りなんですから、隠すなんてこと」
「す、すまない」
罪悪感に押しつぶされそうになるミユキ。
「サナ」
「ブイ?」
サナリスとイーブイが話をしている。それも周りから見れば仲良しに見えるが…
イーブイがサナリスの声掛けに何やら了承した後、さっそく動き出した。
「イーブゥイ!」
「へっ!?あの!?」
「あれ、先輩の方にも…」
「きゃー!頬擦りしてるぅ!可愛いー!!」
「あ、あの、これはですね…」

ーーどうなってるの!?私は会長のことを知ってもらう為にずっとこの子に会長の魅力について語っていたのだけど!そんな私にも懐いてしまっていたというの!?イーブイのままなのに!?
「私にも触らせてくださいーー!」
「!!ブイブイ!」
書記が近寄ると逃げる。
「ガーン!」
「ダメですよそんながっついちゃ。こういうのはゆっくりと…」
「ブーイ!」
「あれ、僕も…?」
「これもしかして…」
イシガミが二人にしか懐いていないことに気づいた。そしてある結論に至る。
「いやいやいや、ぐ、偶然!たまたま!ほら、私結構ポケモンに懐かれやすいし!?」
テンパるカグヤに対してイシガミはズーンといつものネガティブモードに入っていた。
「俺はフジワラ先輩と同類ってことですか…行きましょうフジワラ先輩……」
「同類!ってなんですか!私根暗じゃないです!後やっと今日名前呼ばれた気がするんですけど!」
そう言って先へと歩いていく二人をミユキ達は見ていた。
「どういうことだ?」
「な、なにがです?」
「シノミヤ、どうして色違いのイーブイがここにいるんだ。これは…もしかしてシノミヤのなのか?」
「!!」
ーーい、いけない!バレてしまったら…
『ほう、まさかシノミヤ。俺のことを想ってこんな回りくどい事をしたというのか』
『可愛い奴め!』

ってなるじゃない！ここはなんとか誤魔化さないと…
「い、いえ会長。私はそんな…」
その時ミユキの顔は至って真剣だった。冷かそうというわけもなく、馬鹿にしようとするようでもなく、ただ真実だけを知りたい顔。
「…ええ。そう、です。会長はああ言っていましたが、きっとポケモンは持っていないのだろうと。ならば、会長にピッタリなポケモンを…その、せっかくの思い出作りですし、用意しようと…思いまして…」
「シノミヤ…お前…」
「け、結局杞憂でしたけどね！可愛いサーナイトがいるとは知らなかったもので…」
「シノミヤ。少し寄りたいところがあるんだ。一緒に来てもらえないか」
「？…はい」
そうしてミユキはカグヤと共にアンペルの元へとやってきた。
「おや。もういいのですか？」
「はい」
「サァナ！」
「おかえりなさい。サナリス」
「おっと、私はこれで」
「はい。ハヤサカさん、また」
カグヤとハヤサカの目が合う。ニッコリとするカグヤに対し、しらーっとしながらそこから立ち去るハヤサカ。
「これは、どういうことですか」
「見ての通りだ。このサーナイトはこの人のもので、俺のじゃない。俺は、シノミヤの言う通りポケモンを持っていないんだ」
ミユキは肩の上に乗っているイーブイの下顎を撫でながらそう言った。
「持っていないと言うと、嘘をついているのがバレるだけ。恥ずかしいと思っていたが…シノミヤには、そんな完璧じゃない俺を見て欲しいってさっき思ったんだ」
「か、会長…それって」

「ああ」
ミユキはカグヤをしっかりと見る。カグヤは少し顔を赤く染めながら、ミユキを見る。
アンペルが反時計回りにカフェオレをかき混ぜる。それが終わると同時にミユキが発した。
「シノミヤ、お前俺がポケモン持ってないことを知ってて揶揄うつもりだったな？」
※違う
「ところが俺がポケモンを連れてきたから揶揄うことができなくなって、恥ずかしくて持ってきてたことが言えなかったんだろう」
※違う
「だからシノミヤが恥ずかしい思いをしたのに、俺が恥ずかしい思いをしてないのは変な話だからな。これでおあいこだ」
※違う
「……ふふ、さすが会長。よくお分かりで」
※便乗してるが違う。
そんな二人を見てぷくっと顔を膨らませるサナリス。
「サナー！」
「うわっ！」
「きゃっ！」
強引にカグヤとミユキの手を繋げる。
ーーか、かかかかか、会長の手が！そんな！まだつ、つつ付き合ってもないのに、こんなコウノトリが…
ーーシ、シノミヤの手が、女性の手ってこんなに柔らかっ…じゃなくてだな！
とか顔を紅潮させながら考えている二人を見て、サナリスは満足げになっていた。
本日の勝敗、サナリスの勝利。
「あれ、会長達は？」
「さっきまでいたんですけどね」

第七話　記憶しておきなさい

「こんな貧乏な家族なんて、私はいらない」
　今まで一度も見たことのない、冷酷な目で私にそう言った。お姉ちゃんはその言葉を最後にお父さんと私とワンパチを置いて出て行った。
　元々人見知りで、お姉ちゃんにべったりだった私は、何を信じていいか分からなくなり、お父さんとワンパチがいる家しか休まる場所が無かった。
　でも、今は、稀に訪れる移動カフェも私を救ってくれる場所になっている。
「お久しぶりです」
「お、お、お久しぶり…です！」
　黒髪で桃色のリボンを頭に結んでいる。アンペルに顔を合わせることは少なかれどそれでも懸命に声にする女の子。
「サラさんはここに僕が訪れたら必ず来てくれますね」
「い、いけませんか？」
「まさか。僕は貴方の笑顔が好きですよ」
「あ、ありがとうございます。う、嬉しいです」
　サナリスがサラにブリーのみから作った『ブリー茶』をお渡しする。
「ありがとうございます。サナリスさん」
「サァナ！」
「ワン！」
　サナリスとワンパチが戯れ始める。サナリスの親友と言ってもいい。
「あの！次はいつ頃こちらへ来るのでしょうか」
「うーんそうですね。僕は世界各地でカフェを営んでいますからね。具体的な日を決めるのが難しいのです。ですから、まだ未定ですね」
「そ、そう…ですか。でも、明日はいますよね!?」
「ええ。しばらくはここにいます」
「よ、よ、良かったです。ここのカフェは色んなものがあって美味しい

ですから…」
「ブリー茶しか頼んでませんけどね」
「細かいことはいいです！」
　サラはグッとブリー茶を頂く。アンペルはそんなサラを見てクスッと笑う。
「いつも僕の休憩時間前に来てくれて、そしてこうやって話をするタイミングを作る…最初の方は買ってすぐにどこかへ行ってしまったのに」
「す、すみません。ご迷惑でしたか…？」
「いえ。そうではなく、成長しているのかなと思いまして」
「そ、そんな。アンペルさんは話しやすくて、…声も落ち着くし、なぜかお父さんとお話ししてるような感じがして緊張しないんです」
「そうなのですか」
「はい。私、極度の人見知りなんですけど。ア、アンペルさんなら平気です」
「それは良かった」
　しばらく茶会をした後、営業を再開する時間になる。そこでサラとお別れをし、また明日会う約束をする。
「すみません！これとこれください！」
「”ガケガニサンドイッチ”と、”カフェオレ”ですね。少々お待ちください」
　緑色の髪をした、元気はつらつな女の子。サンドイッチを作り終え、そのタイミングでサナリスがカフェオレを作り終える。
「お待たせしました」
「わあ！ありがとうございます！」
「いいえ。ところで”ブリー茶”は頼まないのですか」
「えっ」
「サラさんの、お姉さん辺りでしょうか」
「え!?な、なんで!?」
「そっくりですので」
「ど、どこかです!?」

「顔」
アンペルはニコッとしながらその子にそう言った。髪型や、テンションこそ違うが、顔だけは非常に似ていた。
「でもそれだけじゃ、ないですよね？だって今日初めてお会いしたのに…」
「いいえ。僕は貴方がサラさんをずっと見ていたのを見ていましたよ」
「えっ…私の隠密行動がバレていた!?」
「サナリスはそういうのが得意なんです」
「サナ！」
「あ…なるほど。ポケモンの力で…」
その子の名前はナオと言った。小さい頃に大富豪の家の養子になったという。それ以来サラとは会っていなかった。
「でもパパの仕事先がこっちになったから引っ越したんですよ。故郷に戻ってきた時はサラに会える！…って思ってたんですけど、ちょっと訳ありで、私からは近づけなくて」
「サナリス曰く、『貴方は罪を背負っている』」
「!……あの、今日お話しできる時間はありますか？」
「ありますよ。十七時には営業が終わります。どこで落ち合いますか？」
「では、私の家の庭で」
「お招きいただき、ありがとうございます」
「サナ！」
用意されたテーブルと椅子。大富豪と言っても差し支えない豪邸。野生のポケモンなのか、管理されているのか…沢山のポケモンがいた。
「おかけください！」
「失礼します」
この豪邸に招いたナオは、さっそく話したいことについて話した。
「私とサラは小さい頃にお母さんが亡くなってて、それ以来はお父さ

んが一人で私達を育ててくれました」
「父子家庭ですか」
「はい。小さな会社でしたけど、何不自由なく過ごせていたんです。ですが、ある日お父さんの事業が失敗して、多額の借金を背負うことに。その助けをしてくれたのが、今のパパです」
「借金の肩代わりとかですか？」
「…鋭いですね。その通りです。それともう一つ、私を養子として迎え入れることです。正確には…私かサラのどちらかを養子にするというお話しです」
　ママは身体が弱くて子供が出来なかったんですよ。だから子供が欲しいってパパはずっと思っていたらしいです。だからこの話を持ち出したんですよ。
「…ふむ。それだけではないですね？」
「はい」
『借金を肩代わりする代わりに、どちらかを養子にする。いいな？』
「こんな言い方してましたし、私も最初は弱みにつけ込んで酷いこと言うなって思ってたんですけど…借金は無くなっても無一文ですもんね。私とサラ二人を養えるほどの経済力が、お父さんにはない。またすぐに借金生活を送ってしまう。パパは私達のことも知ってましたから、あえて敵に回るような言い方をして、私とサラの仲に亀裂が入らないようにしようとしたみたいですよ」
「僕のような大人には察することができる内容ですが…」
「はい。サラは違いました。ずっと私にべったりでしたからね。養子の話なんてしたところで、パパのところにサラが行ったって意味がない…というより、サラはパパを恨むでしょうね。あの子はずっと殻にこもってしまう…なら、お父さんのいる家の方がマシですよね」
「しかし、貴方がいなくなることに代わりはありません。何を言ったんですか」
「パパはお父さんを助けてくれた、恨んでほしくない。だからサラが私を恨むように…『こんな貧乏な家族なんて、私はいらない』って言いました」

思った通り、自分の世界を壊した私を、サラは憎んだ。あの子は私がいなくても生きていけるようになりました。大袈裟ではないですよ。本当にそれぐらい周りが見えてなかったんです。
だからどちらかが養子になるというパパの話すら、サラは知らない。
サラは私がパパの養子になるって言い出したという話を、お父さんから聞いているはずです。
「…さぞお辛いことでしょう」
「私ですか？私は元気ですよ！」
「すみませんが、嘘と本当の見極めは得意なつもりです」
「…自分で蒔いた種ですから、元気でいないとダメなんです」
「サナサナ」
「…？」
「『真実は言わないのか』と聞いています」
「言うつもりはないです。だって…」
「だって？」
「あの子は、ずっと私を恨んでますから。気持ちが高鳴っちゃって…どうしても話がしたくなって、サラに声をかけた時があったんですよ」
『ナオさん。どうして私に会いにきたんですか？貴方は私達のことなんてどうでもいいと思っているくせに』
『そんなことは思ってない！あのねサラ、私またこっちで暮らすことになったの！だから…』
『ふざけないでください！』
今まで一度も見たことのない、鋭い目。その眼光は、この私を一歩引かせるぐらいに怖かった。
『貴方は私達を見捨てたんです。そんな人とお話することなんてありません。昔みたいな距離感で、近づかないでください。二度と関わらないでください。では、さようなら』
「真実を話したら、あの子は自分を責めてしまう。また元のサラに戻ってしまう…」

「大丈夫だと思いますよ」
「えっ？」
　アンペルは茶菓子を一口頂きながらそう呟いた。
「美味しいですねこれ」
「あ、ありがとうございます。…えぇと」
「大丈夫な理由ですか？僕とお話ししてるサラさんはとても誰かを心の底から恨めるような人ではないからです」
「……それは、そうですけど」
「なら、真実を話しても大丈夫でしょう。ね、サナリス」
　サナリスはコクコクと頷いた。
「今日この話をした理由は、私の代わりにサラを支えて欲しいってことなんです。真実を話すっていうその協力をお願いしたいわけじゃないんですよ」
「それは無理なご相談ですね」
「え…なんでですか！あんなに親しくお話してるのに…！」
「それは僕がお父さんに似ているからですよ。ですがそれは所詮偽物です。本物には勝てない。僕がサラさんを支えることは不可能です。支えることが出来るのは、お父さんと…貴方でしょう」
「……」
「あと…ワンパチ」
「!!」
「貴方とサラさんのポケモンですね？貴方はポケモンを持っていないようですし」
「えっ、どうして持ってないって…」
「ワンパチとサナリスは仲良しなんですよ」
　サナリスがワンパチから話を聞いていて、アンペルはその話をサナリスから聞いていた。
　ワンパチはナオとも遊びたいけど、サラが嫌がっていて思うように動けなくて辛いと言っていた。
「……怖いものですよ」
「え？」

「大好きな人や、ポケモン、それらが自分の視界から消える時…それは形容し難い胸の痛みと、恐怖に苛まれます。一度サナリスと離れ離れになりかけた時がありまして。あの時は…本当に怖かった」

「ですから、お節介なことは重々承知の上で伝えるべきだと思います」

ナオはその言葉を聞いて、しばらく沈黙した後静かに頷いた。

次の日になり、アンペルが昨日と同じ場所でお店を開くその時だった。

「アンペルさん！助けて下さい!!」

「サ??????????????????????????ナ？…サナ!!」

「ワンパチが…」

ワンパチの身体が熱い。かなりの熱でこれは何かしらの病気であることは確定していた。

「サァナ……」

「いやしのはどうでもダメですか。体力面ではないようですね…」

「ワフ……」

「ワンパチ…!!貴方までいなくなったら、私は…っ!!」

サラの表情が険しくなっていく。また一つ大事な自分の世界が壊れていく。

彼女の世界は極端で怖いものだった。０か１０しかない世界。お父さんとワンパチが１０。それ以外はアンペルとサナリスを入れても０。０は信用出来ない。１０は信用できる。

しかし、その信用出来るものが「怪我をしない」と言って、怪我をしたら０に失墜する。

サラはワンパチはずっとそばにいると思っていた。そのワンパチが病気か何かで意識が朦朧としている。

ーー貴方までも私を裏切るの!?じゃあ、お父さんも…

彼女の世界だとそうなるのも必然だった。

「ポケモンセンターに連れて行きましょう。僕やサナリスの専門じゃない。いいですね？」

「はい！」
「これは…ストレスですね」
「えっ…」
ジョーイさんの第一声に、サラは膝から崩れ落ちそうになった。
ストレス…？ワンパチは、私と一緒にいることが、辛かったってこと…？
「そんなはずないです！わ、私とワンパチは小さい頃からずっと一緒だったんです！ストレスなんて、そ、そんなことありえません！」
「そうは言っても、ワンパチちゃんの容態を見ると、それしか考えられないの」
「ありえません！もう一度ちゃんと調べて下さい！」
「ちゃんと調べた結果なんです。思い当たる節とかありませんか？」
「あるわけがありません！」
「……」
　人見知りの女の子とは思えないぐらいに大きな声でジョーイに喰らいつく。その猛攻に、ジョーイも一歩下がるが、アンペルがそこで口を挟んだ。
「ありますよ。ストレス」
「え…な、何を言ってるんですかアンペルさん！わ、わた、私の育て方に問題があったとでも…」
「いいえ。貴方は素晴らしい育て方をしてると思います。サナリスとも仲良くしてくれてる」
「じゃ、じゃあストレスなんてないに決まってるじゃないですか！」
「ありますよ。貴方が気づいていない…いえ、気づかないようにしているのではありませんか」
「!!……アンペルさんには失望しました。あの人と会ったのですね。だからそのようなことを…！」
「そう返してくるということは、貴方はやはり、あの人が好きなのですね」
　先程から大きな声を出しすぎたせいで少し息が乱れている。そし

てそこにアンペルが核心をつく言葉を放ち、過呼吸気味になる。
「ワン」
「ワンパチ…ワンパチは、どうなるんですか」
「今日は一日こちらでお預かりします。様子が見たかったらいつでもいらして下さい」
「……はい」
沈黙が続く。アンペルとサラはキッチンカーの前にテーブルと椅子を置いて向かい合うように座っていた。
??????????????????????
ウリー茶も飲まない。何もしない顔を伏せてずっと暗い。
「今日は、ワンパチのそばにいた方が良いと思いますよ」
何も気にすることないように、サナリスが持ってきたアイスコーヒーを飲みながらそう言った。
「……後で会いに行きます。……あの人といつ会ったんですか」
晴天とは裏腹のそのサラの表情はまるで見えないが、泣いていないことだけは確かだった。声は震えておらず、アンペルに聞こえるぐらいには声量は出ていた。
「貴方と別れたその後です」
「それ以前に会ったことは？」
「ないです。昨日が初対面でした」
「……なんで、あの人と私が姉妹だって分かったんですか」
髪の色も、性格も何もかも違うはずです。
「顔はそっくりでしたよ」
「それでですか」
「いえ、僕にはサナリスがいますから」
人の感情に敏感な彼女は、何を考えてるか、どう思っているかぐらいは簡単に読み取れるのです。
「…なら勘違いです。私はあの人のことが嫌いです。全てを捨てたあの人のことをどうして私が好きでいられるんですか。そう読み取られたのなら心外です」
「……人は、仮面を作って演じる…」

「はい？」
「『記憶しておきなさい』」
　アンペルはサラに近づき、人差し指を顔を上げたサラの額にトンと置きながらそう言って続けた。
「『君はこの世界という演劇の一人の役者であると。君の役割はただ一つ。与えられた役を見事に演じること』」
　そう言うとアンペル座った。サラは触られた額を触りながら頭が混乱していた。
「僕の好きな人の、好きな言葉です。人は知らず知らずのうちに仮面（ペルソナ）を作り演じる。ある仮面では本音が言えなくても、違う仮面では本音が言える。貴方は今、演じることができていますか？」
「……それは」
「普段僕に見せている貴方を、今日は演じることが出来ていますか」
「…いいえ」
「演じてみませんか…」
　サラがアンペルに見せる姿は
「好きでは…ないですが、嫌いにもなりきれません…私は、過去の、あの人と一緒にいた時間を、なかったことにしたくありません」
　いつも本音を言っていた。
「ワンパチ…今日はお昼ずっとここにいるからね。私、今日はアンペルさんと話しててちょっと心が軽くなったから…話してみようと思うんだ」
「ワウ…？」
「サラ!!」
「!!……」
　突然扉が開いて驚いたと同時に、ナオの姿を見て心拍数が上がっていった。
「アンペルさんから話を聞いて…ワンパチは大丈夫!?」
「は、はい。大丈夫…です」
　ナオはワンパチの背中をさする。身体がゴロゴロと鳴っているの

が分かる。
　違う。違うんだ。私は、ちゃんと演じないといけないんだ。私はちゃんとこの人と話をしないと…
「ごめんね、サラ」
「え？」
「二度と関わるなって言われたのに、来ちゃった」
「…アンペルさんから聞いてここに来たってことは、お昼に私に会いに行こうと思ってたんじゃないですか」
「うっ…」
「昨日アンペルさんに何か言われましたか？」
「…なんでもお見通しだねサラは」
「お見通しはアンペルさんですよ。いえ…サナリスちゃんでしょうか」
「あはは、そうかもね」
「……私は、貴方を許していません。でも、嫌いにもなれないんです。あの時の貴方は、…いえ、今も貴方は私のお姉ちゃん…だから」
「！…アンペルさんに何か言われた？」
「う、うん…しっかり演じろって」
「えん…？え？」
　サラはナオの両手を掴む。その手は震えていて冷たかった。
「ワンパチはストレスで倒れました。私は貴方を遠ざけていたから…昔みたいに仲良くしてほしいと思ってくれてるワンパチの気持ちを蔑ろにしていたんだと思います」
「それが…原因」
「悔しいけど、それ以外に心当たりが見つかりません。だから…向き合います。……どうして養子になったの？おねえ…ちゃん」
　サラは一歩を踏み出した。ナオはサラに『お姉ちゃん』と呼ばれることはもう二度と来ないと思っていた。
　だからそれがあまりにも嬉しくて、涙腺が緩んで溢れた。
「ごめん…ごめんね。本当は……」
　真実を明かしそれからお互いが謝罪し、どうして謝るんだと言い合

い??????????????????
泣き、笑い、そしてーー
「サナァ！」
「ワン!!」
「ちょっ、私のサンドイッチ食べるなこのー!!」
「待ってお姉ちゃん！近くで暴れないで！」
…休憩時間なのに休憩出来ませんね…

第八話　Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ？

これは昔のお話。
サナリスがまだキルリアの頃のお話。しゃがれた女性の掌が、キルリアの淡く青い髪を撫でていた。
「キルゥ」
「可愛いわねえ」
「あはは。ありがとうございます。サナリスっていいます」
「サナリス？ああ、サーナイトに進化するものね。なるほどなるほど…」
フェルム地方。ここでのポケモンバトルは普通のポケモンバトルは少し違う。
「アースの力は凄まじいものですね」
「ええ。だからこそ見ていて面白いのよ。そんな中美味しいコーヒーも頂けて、贅沢この上ないわね」
アースというフェルム地方特有の鉱石には、ポケモンの力を最大限まで引き出す力を持っている。
その力を使うことで、ポケモンは更なる進化を遂げ、メガ進化することも出来る。
「いつか貴方もこの地方で闘うのかしら？」
「いいえ。僕はサナリスと世界各地をカフェを営みながら歩むつもりです」
「いいわねえ。あ、そうだわ。備えあれば憂いなし…これを持って行きなさい」
そうして渡されたのが緑色の鉱石。
「これは…ジェダイトですか」
「知ってるの？その通りよ。貴方のサナリスちゃんの通常色と一緒の色…お守りとしてどうかしら？」
「確か、災い等から身を守ってくれると言われています…しかし、これは貴方のでは」
「ふふ。いいのよ。私はもう長生きしたから…それに、この石はそれ

だけじゃないわ」
「え？」
「貴方のサナリスがサーナイトになった時…意味を成す。だから持っていってちょうだい」
「…分かりました。ありがたく頂きます」
アンペルとサナリスは頭を下げる。後にこれがアンペルとサナリスの大切な指輪と腕輪になる。
??????????????????????
くるっと回ってまた回る。バレエのような動きをして踊るその姿。
ッシュ地方のとある森の中、太陽の光が木々の隙間から溢れる。その光と、綺麗で透き通った池を背景にサナリスが踊っていた。
フェルム地方を訪れてから数ヶ月。サナリスはまだキルリアのままだった。
「キルッ」
「ふふふ、貴方はまだキルリアのままでいたいのですね」
「キルゥ」
アンペルはサナリスが甘えたがりなことを理解していた。
「さて、サナリス。少し散策をしましょう。もしかしたら美味しいきのみが見つかるかも」
「キル！」
サナリスはそう言われてすぐにアンペルの肩の上に乗った。実際には超能力で多少浮いているため、乗ってはいないが。
きのみの調達は移動カフェでオリジナルブレンドを作る為に必要不可欠。
アンペルの頭の上で揺れながらきのみを採取していくサナリス。
「キル？」
「君達は、何者だい？」
黒い帽子を被り、ジェダイトのような長い緑色の髪をし、スラッとした体型の男が目の前に現れてはそう言った。
「僕の名前はアンペル。この子はサナリスです。貴方は？」
「ボクはN。君達はポケモントレーナー…ではないね？」

「ええ。僕達は移動カフェを営んでおります」
「そうか。それなら良いんだ。もしもポケモントレーナーだったらここから追い出すつもりだった」
「ここは貴方の敷地ですか？それは失礼しました」
「いやそういうわけじゃない。……君はキルリアと仲が良いね」
「サナリスです」
「キルッ！」
「!!……こんなトモダチがいるとは…」
　トモダチ？とアンペルは一瞬気になったがそれはすぐに察した。
　ポケモンのことをトモダチと呼んでいる。そしてアンペルはＮの反応の仕方に見覚えがあった。
　それは自分自身と同じ反応を示したからである。
「心が、読めるのですか」
「！君もかい？」
「いえ…サナリスだけです。他のポケモンに関しては、完全には読めません」
「そうか…」
　Ｎはサナリスをじっと見る。そしてアンペルを見た。その眼差しは真剣で、アンペルも話を聞く姿勢になった。
「ここから出て行ってくれ」
「おや、ここは貴方の私有地ですか？」
「違うけど、ここにいると君達までもが巻き添えになる。プラズマ団という、悪の組織に」
　プラズマ団はポケモンを道具のように扱う輩が大勢いる組織。
　その組織の目的は、自分達以外がポケモンを持たなくなる環境を作り出すこと。
「なんという…」
「ああ。ボクは昔騙されていてね…同じ境遇の仲間と共にプラズマ団から逃げてきたんだけど、奴らはボクを探している」
「それはなぜ」
「ボクが、伝説のポケモンを復活させる石を持っているからさ」

「……なるほど。武力行使というやつですか」
「ああ。だから君達はここから離れた方がいい。プラズマ団がボクのいる場所を特定してくるかもしれない」
「そんな話を聞いて、離れるわけには行きませんね」
「キルゥ」
　Nは瞬きをした後、再度出て行くことを伝えたが、二人はそれを拒否した。
「ボクは君達の為に言っているんだ。頼むから…」
「キル、キルル」
「……確かに傷ついたポケモンを、ボクの仲間が治療してくれているけど」
「では僕達もそこへ。サナリスがいやしのはどうを使えます。傷を癒してくれるでしょう」
「…本当に離れる気がないんだね」
「当然です。僕は笑顔が好きですから。貴方が心穏やかにいられるように助力します。ポケモンの治療が先決ですが、プラズマ団から逃げる方法も考えてみましょう」
「ハァ…分かったよ。付いてきてくれ」
「はい」
　放っておけない。彼の笑顔を見てみたいというのもあるけれど、ポケモンと会話が出来る彼と僕はどこか似ているから。
「移動カフェはしばらく臨時休業ですかね」
　??????????????????????????
　ランペルの言葉にとんと反応しない女性二人。Nが言っていた仲間というのはこの二人。
　髪が黄色く三つ編みを一つ結びにしているヘレナと、桃色の長い髪をしたバーベナ。
「嫌われ者ですかね」
「ごめんね。彼女達…特にヘレナはボクとバーベナ以外の人間をすぐに信用しないんだ。理由はあるんだけど、詳しいことは言えない」
「構いません。サナリス、どうですか」

「キル」
「おお、よく頑張りましたね」
アンペルが移動カフェをしばらく休むと言った理由は、想像以上に怪我を負ったポケモンがいたからだった。
ヘレナとバーベナの治療を持ってしても、追いついていない状況だった。
サナリスとアンペルの助けにより多少マシにはなったものの、時間がかかるのは明白だった。
持ってきたキッチンカーの中はサナリスと二人だけの空間で、そこでお互いに今日の成果を称え合っていた。
「…信じられません。このような光景が見られるなんて」
「ああ。ヘレナの言う通り…ボクも信じられなかったよ。けれど、二人は互いを信じ合っている。それに…」
「ええ。サナリスというキルリア…あれは野生です。野生のポケモンがどうしてあんなに尽くしているのでしょう」
「分からない。でもなんでかな?彼の言葉を聴くと何故か心が落ち着くんだ」
「それは…私達もです」
「バーベナ」
「あの方の声色なのでしょうか。気を許してしまいそうになる」
「うん。ボクとしては、気は許してあげてほしいけどね。彼が極悪非道な人間とは到底思えない」
??????????????????????
一つの間にかキッチンカーの中はポケモン達でいっぱいになっていた。傷を癒してくれたアンペルとサナリスに懐いてしまったようでヘレナとバーベナ、そしてNもそれを喜んでいた。
「元々人間不信なトモダチしかいなかったんだ。ボク達にしか心を開いてくれない」
「ですが、貴方達のことを大切に思ってくれるようになりました。感謝しています」
「僕達は僕達のやるべきことをしたまでですよ」

ヘレナが連れているサーナイトと一緒に踊りをするサナリス。それを見ているバーベナのゴチルゼル。そして盛り上がる他のポケモン達。
「…いいですね」
「え？」
「ヘレナさんのサーナイト…非常に綺麗です。サナリスが懐くわけです」
「ありがとうございます。貴方のサナリスもいつかサーナイトになれますよ」
「そうですね。その時が来るまでの、お楽しみですね」
「…今まで本当にありがとうございました」
ヘレナが頭を下げる。それに少しばかり驚いたのか、遅れてN達も頭を下げる。
「おかげで治療は済みそうです。これからは私達だけでなんとかなります。これ以上、貴方達を巻き込むわけには行きません。今日でお別れとしましょう」
「…分かりました」
三人の優しく包み込む笑顔が見れた。治療したポケモン達が笑顔になった。アンペルがこれ以上ここにいる理由もなくなった。
「では最後に一つだけ。ここはもう近いうちに離れた方がいいでしょう。新たな土地を探すことを提案します」
「ああ。ボク達もそれを考えている」
「そうですか。それではまためぐり逢いましょう」
ーーその時だった。ヘレナのサーナイトと、アンペルのサナリス、そしてバーベナのゴチルゼルが互いにピクッと反応した。
「！どうやらお別れはまだ早いようです」
「えっ？」
刹那、謎の光線が治療されたポケモン達の一部に当たる。その光線によって舞い上がった土煙と共に、沢山の人たちが現れた。
「ゴホッ…いきなり乱暴な…」
「おにごっこは終わりだ。Nよ」

「!!…ゲーチス」
　プラズマ団のボスが顔を覗かせた。Ｎと同じような髪色で、赤い瞳孔や、ほうれい線が目立つ。
「ライトストーンをよこせ」
「断る」
「Ｎさん、逃げてください。僕がこの人たちを足止めしますので」
「アンペル、冗談はよしてくれ。これだけの人数…さすがに無理だろう」
「策はすでにとってあります」
「え…？」
　アンペルがスマホロトムを取り出した。そこから聴こえた声は男性の声。
『私の名前はハンサム。国際警察の者だ！君達プラズマ団の行為はすでに調査済み。今すぐそちらに向かう！』
　アンペルはニコリと笑って見せた。Ｎはキョトンとしている。
　ーー国際警察と面識があることも驚きだけど…どうしてすでに呼んでいるんだ？まさか…サナリスから聞いたのか？
　そう思って視線をやると、サナリスがエヘンと胸を張っていた。
「ボクよりもトモダチに耳を傾けてないかい？」
「サナリスにだけですよ」
　アンペルはニコッとした後、すぐにゲーチスに目を向ける。ゲーチスは笑うことも、驚くことも何も反応せずただただ眉間にシワを寄せたままだった。
「アクロマ、いつまで待たせる気だ。早くコイツらを動かせ」
「言われずとも。私の研究の成果をお見せしましょう」
　円型の機械に乗っている男が現れた。その機械の先端には筒状になっておりそこから煙が上がっている。
　ーー先程の光線ですか。あの変な髪型をしている男…
「ふふふ、先程の光線が何か気にしているようですねえ。実はあれは電波なんですよ」
「電波？」

「そうです。さあ、皆さん！Ｎからライトストーンを奪いなさい！」
その声と共に、治療していたポケモン達が動き出す。そしてＮに襲いかかる。
「これは!?」
「ポケモンを操るというのか…外道な」
ヘレナのサーナイトがＮを助かる。そしてバーベナのゴチルゼルが他のポケモン達を”まもる”で止める。
「キル！」
「ええ、煌びやかに参りましょう」
テレポートし、アクロマの目の前に。
「なっ！邪魔をするのですか！この素晴らしい研究成果を壊すと！」
「その才能は別に使えば良いじゃないですか」
サナリスがアンペルの肩から離れる。そして”マジカルフレイム”を放とうとしたその刹那ーー
「サザンドラ。”ラスターカノン”」
「キル!?ーーキァ！」
「!!」
「グァァァ!!」
サザンドラの咆哮が轟く。ラスターカノンがサナリスに命中し、アンペルのいる位置から遠くへ飛ばされる。
「我々の邪魔をするな部外者が」
「あのキルリア…色違いというだけではない…見ましたかゲーチスあの子達を！」
「興味ない。早くＮからライトストーンを奪え」
「はぁ…今あの二人は喋らず、技を出したのですよ！ポケモンの研究において、新たな可能性を秘めている！エスパータイプだからでしょうか…それとも」
機械から飛び降り、走るのはアンペル。サナリスの方へと向かって行く。
ゲーチスがそれを止める為、サザンドラに”りゅうせいぐん”を使わせ邪魔をする。

「くっ……サナリス！」
「それでは喰らいなさい！」
「キルゥ…!!」
　サナリスに電波が命中した。アンペルが間に合わず、助けることができなかった。
「さあ、サナリスとやら！その力でＮからライトストーンを奪いなさい！」
　ーーやめなさいサナリス！
　サナリスに、アンペルの声は届かず。マジカルフレイムがＮの方へと放たれる。
「チィル！」
「ゴチルゼル！」
「大丈夫だアンペル！ボク達なら、まだなんとか…！」
　ゴチルゼルの”まもる”でなんとかＮに直撃は免れたものの、サーナイトもゴチルゼルも体力がかなり消耗している。
「これではジリ貧です。サーナイトもゴチルゼルも限界が来てしまう…」
「ヘレナ、落ち着きましょう。なんとかして暴走しているこの子達を止めるのが、使命」
「ああ。心の声が聞こえるボク達だからこそ、寄り添ってあげれるんだ！」
　Ｎ達が奮闘している中、アンペルはサナリスと正面を向く。
「……貴方とこうやって敵対するのは、初めて会った時以来でしょうか」
「……」
「貴方とこうやって、人を傷つけ、誰も守れなかったのはいつ以来でしょうか…いえ」
　アンペルはＮ達を見て、真正面を向く。
「あの時のようなヘマはしません。まだ僕は守れる！移動カフェ”安らぎ”は、貴方とまだ続けます。決して終わらせません！」
「キ、キルゥ！」

テレポートでアンペルの死角に入り、Ｎ達の距離を詰める。
「なっ…」
ーーこれは、間に合わない！
マジカルフレイムがＮの方へと放たれるその刹那、Ｎはそう思っていた。サーナイトも、ゴチルゼルも動き出しが遅れたのである。加えて、治療されたポケモン達の妨害。ピチュー達であろうとも、迂闊に攻撃が出来ないヘレナ達にとってはかなり厄介だった。
攻撃を受けると思ったその時、喰らったのはＮではなく、アンペルだった。
「!!キル…」
「くっ…」
アンペルが倒れる前に、思わずＮがアンペルの身体を支える。
「ボクを庇って…すまない」
「良いんです。それよりも…皆を」
アンペルが身体を起こし、ゆっくりとサナリスに近づく。
しかしその足取りはフラフラとしており、ついには膝をついた。
「ふーっ…」
衣服が多少灰に、鳩尾に攻撃を喰らい呼吸もままならず、意識が朦朧としていた。
「大丈夫…大丈夫です。今は世界がゆっくり見える」
極限状態というやつでしょうか。おかげで良い物を思い出しました。
しかしそれは先程の衝撃で半分に欠けていた。だがそれも運がいいと思ったのか、アンペルはサナリスにそれを力を入れて投げた。
「災いから、守ってください。力があるのなら」
サナリスがそれを手に取った。ジェダイトの光を見て、サナリスは思わず、嗚咽することなく涙をこぼした。
そしてーー
光った。
「これは…！」
「ーー……サナ」

誰もが目を疑った。確かに見た目はサーナイトだった。しかし…

「黒いドレスの様な姿に、ハート型の突起…？これは、また研究の対象になりそうですねえ…!!さらに今、あのサーナイトは私の電波によって私の言いなりになっている!!これは……」

ーーサナリス。煌びやかに参りましょう。

ーーサナ!!

ギュッと握ったジェダイトが光を放つ。アンペルの持っているジェダイトも同じく光る。

「…そういうことでしたか」

これ…アースの力が籠っている。

「サァァアナ!」

「なっ、何故…!!」

”ムーンフォース”がアクロマの機械を壊す。アクロマがその機械から落ちると、睨みつける…どころか目を輝かせた。

「素晴らしい…!!なんということか!このような貴重な体験が出来るだなんて!」

そんなアクロマにゲーチスが舌打ちをした。

「サザンドラ!”ラスターカノン”!」

そのサザンドラの動きより、サナリスは速く動き、”ムーンフォース”を当てる。

「…バカな!認めぬ!!認めてなるものか!!」

立て!サザンドラ!コイツらを一掃しろ!

その声ももうサザンドラに聞こえていない。サナリスの攻撃があまりにも強力だった。

機械が壊れて、全員自由に動ける様になった。そのポケモン達が一丸となり、ゲーチス達を食い止める。そして、ハンサム達がやってきた。

「プラズマ団!貴様らを逮捕する!!」

ー終わりましたか。

その言葉に安堵したアンペルは静かに目を閉じた。

????????????????????????

「…んっ」
「サッ！……サァア！」
　嗚咽しながら抱きつくのは、メガ進化していない、アンペルの大切なポケモンだった。
「サナリス…泣いているのですか。おはようございます」
　身体を起こすと、少しまだ痛む。しかし、サナリスを撫でる為、彼は起き上がった。
「！アンペルさん！」
「ヘレナさん…とバーベナさん。おはようございます」
「ああ…！本当に良かった！丸二日眠っていたんですよ！」
「そんなに…それは、ご迷惑をおかけしましたね」
「いいや。それはこちらのセリフだ」
「Nさん…」
　Nは頭を下げた。そしてヘレナとバーベナも頭を下げる。
「詫びさせて欲しい。ボクのせいで巻き込んでしまった。なにも力にはなれなかった。サナリスを悲しませてしまった…」
「いえ。貴方のせいではありません。プラズマ団のせいですよ」
「だが、そのせいで、君のサナリスは進化してしまったじゃないか」
　サナリスは進化したくなかった。まだまだキルリアのままでいたかったと…そう思っていたのは分かっているんだ。
　N達が言うように、サナリスは進化したくなかった。その理由は甘えたかったから。キルリアのままであれば、ずっと肩車してもらいながら、街を歩くことが出来たからである。
　しかし、プラズマ団との闘いにおいて、進化してしまった。進化しないと勝てないからと踏んだから。
　それに後悔はない。けれども……やはり肩車出来ないのは、寂しい。
　サナリスのその感情に、アンペルはクスッと笑ってみせた。そして外に出ましょうと言った。
　多少荒れてはいるけれども、これはプラズマ団に勝った証。
　ハンサムからは感謝の言葉を頂いたらしい。責任を持ってここを

綺麗にすることを約束してくれたそうだ。
「なら、今だけ、プラズマ団に勝った跡があるわけですね。…そうですね。遺産と言いましょうか」
「遺産？」
「ええ。こっちの方が少し特別感があるでしょう？…さて、僕はずっとサナリスとしたかったことがあるんですよ」
「サナ？」
「キルリアだった頃、美しく踊っている貴方を見て、僕も踊りたいと思っていたのです。…しかし身長差がどうしてもありました。けれども今は、向かい合いながら手を繋げれる。とはいえ、僕は踊りの経験があまりにも少ないですが」
　アンペルはそういうと、お手をとってくださいというように、手を差し出した。
「Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ？」
「……！サナ！」
　すると、ジェダイトが反応し、サナリスがメガ進化する。黒いドレスのような衣装がさらに舞踏会を彷彿とさせた。
「粋な誘い方だね」
「Ｎ？」
「『それを承知の上で踊りませんか』なんてお誘い…断れないよね」
　せっかくだし、みんなで踊ろうか。舞踏会みたいにね。
　サナリスがアンペルの手を取り、一緒に踊る。Ｎ達も、ポケモン達もそれぞれ違った踊りを見せる。しかしその中心にいるのはアンペルとサナリスであることはずっと変わらなかった。
「僕は貴方が、電波を受けて言うことを聞かなくなった時…離れ離れになる気がして怖かった。恐ろしかった。でも今、こうやって一緒に踊れている」
「…サァ」
「ええ。これからもずっと一緒です。ですから…一緒に作りましょう。指輪と腕輪を。僕達の…生涯の契りを交わしましょう」
「!!」

踊りながら、アンペルは真剣に、少し顔を赤ながらもそう言った。サナリスはそれにつられて紅潮し、涙が溢れそうになりながらニコッとして頷きながら、少し踊りの間のあるところで、目を閉じたまま背伸びした。

それにアンペルもしっかりと応えた。

「離れません。絶対に」

「サナァ」

第九話　楽をする為なら

何もせず生きてみたい。
まあ簡単に言ったら、働かずに生活したい。なんだっけ…不労所得ってやつか。将来は働かないで金だけ貰えるような、そんな生活をしてみたい。
というのもさ、俺はこんなぽっちゃりで、ケッキングみたいな顔してるけど、俺よりも五歳下と七歳下の弟達の世話をしてんだ。うるさくてしつこくてほんと嫌になるんだ。加えてブニャットの飯にかかる金がすげえ。
疲れちゃって嫌になる。だから働く年齢になった時は、今まで頑張った分弟達が俺に孝行してくれたらなんて思ったりする。
けどまあそんなことはしないだろうし、アイツらが落ち着くまで俺は世話しなきゃなんだと思う。
「ハァ…」
父ちゃんは仕事で帰りが遅いし、母ちゃんも飯作ってる間は弟達の世話なんて出来ねえし。
でもなんで俺がやんなきゃなんだってなっちまって。
将来は働かないで暮らしていきたいってなった。
「タクロウ！今日帰りどっか寄らねえか？」
友達が俺にそう言ってくる。
「悪い。帰んなきゃいけねえんだ。母ちゃんの体調が悪くてさ、弟達の飯使ってやんねえと」
「ええ、大丈夫かよ」
「大丈夫大丈夫。母ちゃんはちょっと具合悪いだけで、一人で薬飲んで寝てるから」
「あー、なら別にちょっとぐらい息抜きしてもいいんじゃね？頑張りすぎだぜお前は」
「息抜き…まあ確かにな。でも今日は帰るわ。明日ちょっと遊ぼうぜ」
「おおそうか？分かった！また明日な！」

そう言う約束をして俺はハイスクールを出る。息抜きかあ、確かにあんまりしてなかったなあ。
たまにはそういうことをしても、バチは当たらねえ…よな？
そう考えていると、良い香りがこちらまで漂ってきた。その匂いは目の前で営んでいた移動カフェの、ラテの匂い。
「サナ？」
「うお！色違いのサーナイト！しかも、なんかちっちぇ」
「あはは。少しばかり身長は低めかもですね」
タクロウは店主のアンペルの声に反応した。この人がこのサーナイトのパートナーか。
「何かいただきますか？」
「ああ、いや、俺これから帰ってご飯の支度しなきゃなんで…」
「それは素晴らしいことですね。疲れているのに、ご苦労様ですね」
「え、分かりますか？」
「はい。猫背になっていて、身体が怠そうでした」
「うわ～、なんかそう言われると恥ずかしいっすね」
サナリスがタクロウの肩を軽くトントンと叩く。タクロウはそれにちょっと笑った。
「人懐っこいなあ」
「頑張ってる人を応援したくなるんですよ。彼女は」
「ああ、健気っすね。俺は感心こそするけど、疑問にも思っちゃうからなあ」
「疑問ですか？」
「はい。ほら、働かなくてもお金を稼いでる人っているじゃないっすか？ああいうの、良くないですか？俺も将来はあんまり働きたくないんすよねえ。だから労働する人達を見てると、なんで働いてんだって思っちゃうんすよねえ」
「サァナ」
ちょっと予想外だったようで、「へえ」というような反応を示すサナリス。
「貴方みたいな人は、きっと働くことに価値を見出して働きそうです

けどね」
「そっすかねえ…」
「ですが、確かに魅力的ではありますよね。働かずにお金を稼ぐ…」
「でしょう？」
「まあ…それは難しいかもしれませんが」
「え？なんで」
「『労働』は、僕達『人間』と切り離されたことがないですから」
　タクロウは首を傾げた。するとアンペルはクスッと笑い、コップを取り出した。
「僕の愛用のコップです。僕は情熱ある”赤”が好きですが、ホットココアを飲む時などは両親が好きだった”青”と”緑”のラインが入ったコップを好みます。落ち着くんですよね、これ」
「は、はあ…」
「このコップも…名も知らない人が『労働』して作った物」
　アンペルはそう言って両手を広げる。
「このキッチンカーも、貴方の服も、コンクリートも建物も何もかも…人とポケモンが『労働』して作り上げた物」
「……」
「昔は、『労働』して水や、食糧といった『必要な物』を手に入れていた。ですが、今は『労働』して『暇』を手に入れるようになった。だから貴方のいう、働かずにお金を稼ぐというのは、難しいんですよね。スイッチ一つでお風呂が沸いたり、立ってるだけで移動するエレベーターだったり…労働せずとも『必要な物』を手に入れられる…結果、僕達は暇を持て余してます」
「えぇ…俺、けっこう頑張ってるせいで、暇なんてないんですけど」
「ふふ。そうでしょうか？ですが確かに…人は楽をする為なら永遠の努力をします。結局、将来は『働かずにお金を稼ぐ』方法を模索する…そういう『労働』をすることになるでしょうね」
「……」
　考えたこともなかった。
　あまりにも身近なものすぎて、実感が湧かなかった、というのが正

しい気がするけど。
俺が今着ている学生服も、モンスターボールも、このサーナイトの左腕につけている腕輪も、ラテも、コーヒーも看板も…
労働の跡。
「ところで、時間は大丈夫ですか？」
「あ！いっけね！すんませんあざした！」
「いえいえ。またどこかでめぐり逢いましょう」
タクロウは走って帰る。運動神経は良くないし、体力も全くないが、ちゃんと走って帰った。
「ああいうちゃんと真面目な方が、幸せになれる世の中であるのは、いいことですよね」
「サーナ」
「ん、休憩にしましょう」
「母ちゃんは、おかゆで、弟達には…」
フライパン。これも労働で、あ、そう言えばこの家もか。労働で…
本当に何もかもが労働で出来てるんだなぁ。
そういや、スマホとかもそうか…
人は楽をする為なら永遠の努力をする…か。
確かに、スマホってすげぇ便利だし、無かった時代のことを考えると凄い楽になったよなぁ。
便利＝楽…ってことなのかも知れない。
そうして世の中機械だらけの世界になって、そうして狂いのないどれもこれも同じクオリティの物が出来上がっていく世の中に…
なんか、なんかなぁ。
便利なんだけど、それってモヤモヤする。胸の辺りにシコリが出来て気持ち悪い感じ。
その時、テレビの放送が聞こえてくる。
『今日は職人のガンテツさんにインタビューしていきます！ずばり！ガンテツさんにとって、モンスターボールとは！』
『命！この一言に尽きる！』

命…命？
ああ、でもそうか。なんとなくスッキリした気がする。
「にいちゃん！どしたのー？」
「にいちゃんちょっと考え事してた」
「珍しい！どんなこと？」
「『労働』っていうのは、『生きること』と直結してるのかもなって」
「？意味わかんなーい」
「お前もいつかは分かるよ。さて、めしつくっぞ！」
「わーい!!」
そうだ、俺…母ちゃんの作った手料理が好きだ。
機械だったらきっと毎日同じ料理を出したら、毎日同じ味がするんだろうけど…母ちゃんは目分量だから、毎日同じ料理を出しても、毎日違った味がするんだ。
でもそれが良いってわけでもない。『労働』って奥が深いんだな。
移動カフェのお兄さんも、移動カフェを経営することが『生きること』になっているのかもな。
「ふはっ」
思わず笑ってしまった。なんだ俺、働きたくないとか言ってるくせして、働くことについてすっげえ真剣に考えてんじゃん。

第十話　無駄なこと

「サッナサナ、サナサッナ♪」
　きのみの収穫をしながら鼻歌を唄うサナリスを、キャンプ用の椅子に座りながら眺めるアンペル。
　次の目的地に移動する途中、キッチンカーを止めて少し休憩しようとしたところ、かなり品質の良いきのみが成っているのに気付いた為、サナリスが率先して採取している。
「サナ！」
「大量ですね。ですがこれだけあれば困ることはないでしょう。では、いきましょうか」
　サナリスを乗せ、キッチンカーを発車させる。
　その砂利道は先日の雨の影響で多少泥濘んでいる。だから気づいた。
「車が変なところで曲がってますね」
　キッチンカーを止めるや否や、アンペルはそう言った。
「サナ？」
「タイヤの跡…ほら、右に曲がっている。この先は森の中だというのに??…どうしてでしょう」
「サアナ…サナ」
「そうですね。気になりますね。その先に行ってみましょうか」
??????????????????ー私は今の状況を、客観的に見ている。
「ふざんな!!娘の命がどうなっても良いのか!?」
　サングラスをかけて、黒い帽子をかぶって、マスクを付けた男が、空き家の中に私を閉じ込めている。
　誘拐犯だということは明らかだ。そんな男がイライラして電話先の相手にそう吠えていた。
　これはおそらく私の父親だろう。なぜなら私の父は大手企業の社長で大金持ち。だから私を人質にしてお金を要求している。
　この男は、何もわかっていないんだなって、そう思う。

「くそっ!!おい、お前！お前はあの企業の社長の娘だろうが！なんで二千万の身代金を払おうとしないんだ!!」
「ーーハァ」
「なっ…」
　男はブルっと震えた。この状況で涙もせず、震えもせず、ため息を一つ溢すだけの短い銀髪の女に、不気味さを覚えた。
「私、何歳に見えます？」
「あぁ？お前は、１０歳だろまだ」
「はい。そうです。そんな私がこんな目に遭ってるのにどうして冷静なのか分かります？」
「助けが来ると分かってるんだろ！二千万ぽっち払う気がないのも、こっそり警察に連絡してるからとかな！だが生憎、俺はその手の回避方法は調べ尽くしてんだ。どうやってもここに警察が来ることはない！それに、俺にはボーマンダがいる。来たとしても、返り討ちにしてやるだけさっ！」
「……ハァ」
「な、なんだよお前さっきから！これでも怖くねえってのか！」
「的外れが過ぎるんですよ」
「なに!?」
「私が冷静なのは助けが来ると思ってるからじゃありません。逆です。来ないって分かってるから冷静なんです」
「…はぁ？」
　どうして社長の娘がポケモンの一匹も持ってないんですか？どうして防犯ブザーなるものを持ってないんですか？どうして護衛のような方がいないんですか？
「あ、客観的に見ることを意識してたら理解しましたよ。私みたいな無能でも、犯人さんが的外れな推理をした理由」
「あぁ!?」
「犯人さん、貧乏ですよね？だからお金が欲しいんですよね？」
「っ！だからなんだってんだ！」
「お金を稼ぐ方法を一つ伝授してあげますよ。そしたら私の言ってる

ことが理解できます」
「…なんだよ」
「質問形式にしますね。お金を減らすにはどうしたらいいですか」
「お金を使うんだよ。当たり前だろ」
「正解です。では、逆に、お金を貯めるならどうしたらいいですか」
「逆でお金を使わねえ！なめてんのか！」
「正解ですし、舐めてません。ということで、以上、お金を稼ぐ方法でした」
「……は、はぁ!?」
「簡単な話ですよ。無駄なことにお金を使わなかったらそれだけでお金は貯まるんです。私の父は無駄なことにお金を使わない。だから『お金持ち』なんです」
「……!!」
「理解しました？」
　ドンッ！と壁を思いっきり殴る男。眉間に皺を寄せていて、失敗したと言わんばかりに目線を落とす。
　ーー私は、要領が悪くて父の言われたことをこなす事が全くできない。愛情という愛情を注がれた覚えもない。それでも生きる為にはあの人のそばに居なくてはいけなかった。
「無駄なことなんですよ。私の為にお金を使うことなんて。だから助けなんて…」
　その時だった。車の音が聞こえてきたのだ。
「だ、誰だ!?誰がきた!?」
「…ありえない。誰かが来るなんて…」
「そうでしょうか？赤の他人が助けに来ることもあるでしょう」
「えっ？」
　いつの間にか私の後ろに人がいる。
「な、なんだお前!?どうやってここに…!!」
「変なところで右折した車が気になりまして。あ、それとも僕がこの空き家の中にいる理由ですか？それはサナリスがいるからです」
「サナ！」

「サーナイト…ちっ！いけ！ボーマンダ！あいつらごと燃やせ！かえんほうしゃ！」
「物騒な…」
　ボーマンダを出すや否や辺り一面にかえんほうしゃを放ちとんずらを始める男。車に乗るのでは無く、ボーマンダに乗って空を飛ぼうとしていた。
「背に腹はかえらんねえ…！ふーっ…いくぞ!!」
　男は目を瞑ってボーマンダに指示を出した。
「サナリスって、手先は不器用ですが、超能力の扱いは超一流ですので」
「ガァ!?」
　ボーマンダより遥か上空に、アンペルと女の子とサナリスがいた。そしてサナリスは問答無用でムーンフォースをぶち当てる。
　女の子は空から見える景色に息を呑んでいた。
「う、うぁあああ!!!!」
「サッナ」
　ボーマンダは戦闘不能。男も助けはしたがクルクルと頭の上にポッポが舞っている。
「ボーマンダなのにどうして車なのかと思ってましたが…なるほど、この人高所恐怖症ですね」
「…あの、どうして助けて…」
「え？いや、そりゃあ助けるでしょう。理由なんてないですよ。本能に従っただけです」
「あ…ありがとうございます…」
「いえ。では、貴方の社長さんにお会いしましょう。あ、その前に警察ですね…」
「貴方が、私の娘を？」
「はい。しがない移動カフェ”安らぎ”のアンペルと言います」
「ふむ。ありがとう」
「いえ。では」

「あ、あの」
「はい？」
　女の子がアンペル達を引き止める。それを見て父は眉間に皺を寄せ声を出した。
「何をしているリシテア。人様に迷惑をかけるな」
「っ…すみま…せん」
「迷惑だなんて思っていませんよ。どうかしましたか？」
「いえ…なんでも…」
　目を伏せて、視線を合わせない。そんなリシテアをそっと抱きしめたのはサナリスだった。
「サァナ～」
「っ…」
「……あの、リシテアさんのお父様。この子、僕に預からせてもらえませんか」
「!?あの…？」
「どういうことかな。私の娘なんかを連れてどうするんだね」
「僕の移動カフェ”安らぎ”次期店主になって頂こうかと」
「は、はい!?」
　リシテアの反応とは真逆で、父は眉一つ動かさなかった。
「この子はね、要領が悪いんだ。言ったことをすぐに破る。何度も繰り返す。叱っても、コツを教えても何一つ上手くできやしない。経営なんてもっての外だ。やめておいた方がいい」
「それでも構いません。どうでしょうか」
「そうか。なら好きにしろ」
「…貴方は本当に娘さんのことをなんとも思ってないのですね」
「なに？」
「普通は止めますよ。赤の他人、しかも初対面の人が連れて行こうとしてるのですから」
「ふん。だからどうした？そいつはな、私を裏切っていた妻の副産物なんだよ。血の繋がりなんぞない。本来なら娘としてこちらに来ることはなかったんだ。そんな奴を育てるなんて反吐が出る。私の血

が流れていないから、無能なのだ。今まで暴力などは振るわず、世話してやったのだから、むしろ感謝してもらいたいな」
リシテアは理解していた。自分は確かに副産物であるということを。物心がついた時から説教の時に度々その言葉を聞いていた。
「残念です」
アンペルは表情を変えずにそう言った。
「大手企業の社長ですから、相当人望の厚い方だと思っていたのに。実際は価値があるかどうかで決める、いつか足元を掬われる方だとは…」
「なんだと？」
「”子供が居なくては、親にはなれません”」
そうしてようやく、いつもの穏やかな眼が、鋭い眼光へと変貌した。
「”子が親だと認めて初めて親になれる”のです。リシテアさんは貴方を父だと思っている。貴方が娘だと思っているかどうかではないんだ。そこを履き違えるんじゃない」
「……では、いつかまためぐり逢いましょう」
リシテアと手を繋ぎ、その場から離れる。サナリスのテレポートによって、目的地に辿り着く。
「さて、営業を始める準備をしましょうか。かなり時間がかかってしまった」
ーーさっきの表情、声色…
リシテアから見える、下からの角度のアンペルは、憤りを隠せないように見えた。
それは一体何故なのか。リシテアには分からなかった。
ーー無価値な私をどうして…
自身を卑下しながらも、今までとは違う心持ちになっていた。
ーー知りたい。私は、この人を。
「アンペル、さん」
「はい？」
「これから…よろしくお願いします。サナリスさんも」
そう言って頭を下げる。アンペルとサナリスは同時によろしくと

返事をした。

「移動カフェ”安らぎ”へ、ようこそーー」

第十一話　コンプリート特典

いい匂いがする。それでいて落ち着くような…
むくりと身体を起こすのはリシテアだった。
「おはようございます」
「サナ」
ーーそうだ。私は、今はこの人達と一緒にいるんだ。
温かいカフェオレと、ワンパチの顔が描かれたパンケーキ。
「朝ご飯？」
「ええ。甘い物は頭を働かせてくれますから、どうぞ」
「サァナ」
「サナリスはこれ」
それは美味しくて、柔らかくて、甘い。そして何より温もりのある食事だった。
思わず涙が出そうな初めての朝ご飯でした。
ーーリシテアの日記ーー
ここはとある家の中。そこには以前アンペルが訪れた街で、ナナミが住んでいる。
ナナミは、深い眠りの中でうなされていた。
「ふぅ…あう…!!はっ…!!ハァ…ハァ……」
怖い夢を、たまに見る。紛れもなく私なのに違うというか…周りはみんな知ってるのに知らないというか…
だけど大切な人達であることに変わりはなくて、その人達の為に一生懸命頑張ってた。
目の前から槍が飛んできてそれが腕を掠めて行く。そしてそれは次第に…
「ニャオ？」
「マスカーニャ、おはよう」
唯一いないのは、この子。この子がいない。そんな夢。

「どうしたんだナナミ？また寝不足か？」
「うん……ゲームのしすぎで」
「相変わらずだな…」
　でも本当はそれだけじゃない。でも話したくないような怖い夢。その夢の中にはヒナタくんもいた…と思う。
　ただ、髪が凄く長かった。そしてなんか希望を失っていたかのような希望だった。
　意味がわからないかもだけど、一番の分かりやすい表現をした…つもり。
『それは違うよ』
　ゲームの主人公がそう言って、相手の矛盾を打ち抜いて行く。寝そうになりながらもゲームを続けてしまうのは、綺麗なエンディングと、クリア後の特典が欲しいから。
　そんなどうしようもない私を、いつも隣で見てくれて、色々なことを教えてくれる人がいる。
　そんな人が『ツマラナイ』って言ってた。そんな夢。
「それは、前世の記憶だったりしませんか」
「え…？」
　またこの街に来ていた移動カフェ”安らぎ”の店主、アンペルさんが、私の話を信じてそう答えてくれた。
　最初は、この人なら心のモヤモヤを払ってくれそうだなって思ったから話しただけなんだけど…まさかゲームのようなことを言ってくるとは。
「前世…興味深い話です。どうしてそう結論付けたのですか、先生」
　キッチンカーの外からピョコッと顔を出したのはリシテアだった。
「あれ…？君は、この前はここにいなかった…よね？」
「あ、はい。リシテアと言います。このカフェの見習い…です。よろしくお願いします」
「あ、どうもご親切に。…ナナミ　チアキ　です。よろしくお願いしまーす」
「はい。…で、理由を教えてください」

「幻のポケモンにアルセウスという、宇宙を創造した神というのがいるのですが」
　アンペルはアルセウスの顔が描かれたラテアートをナナミに渡した。
「これが、アルセウス…」
「サナ！」
「おや、サナリスもラテアートは上手くできるようになりましたね」
「おお、これはサナリスの顔…」
「サナッ！」
　胸を張るサナリスに対して、誰が飲むの？と呟くリシテア。サナリスは自分用に作ったらしく、写真に収めた後飲み始めた。するとサナリスはリシテアの腕を引っ張ってキッチンカーの中に入って行く。
「サナリスが誕生したのも、そのアルセウスのおかげですね。宇宙が無ければ、サナリスはいないですから」
　話を戻しますと言うと、アンペルは休憩時間と書かれた立て札を置いて、キッチンカーから出た。
「アルセウスは分身を生み出すことができ、本体を見ることは叶わないとされています。なぜならその本体は、時間と空間を超越した領域にいると言われているからです」
「ほー…それはまさに幻ですなあ」
「そうでしょう？そこで何をしてるかと言うと、あらゆる宇宙を観測しているんだそうで…」
「あらゆる宇宙？…マルチバースってこと？」
「そうですね。もしかしたらそこで生み出されたチアキさんの世界には、ポケモンがいなかったのかも」
　突拍子もない、あまりにも現実性もない話。
　うーん…と空を見上げながら唸るナナミの裏では、リシテアがサナリスと一緒にラテアートの練習をしていた。
「でも、凄い面白い話ですね。本当にゲームみたい」
「ええ。そういうゲームみたいですね。ですけど、そう考えると想像が膨らみませんか」

「想像？」
「ええ。貴方のいう、その怖い夢の先にはどんな出来事があるのか…それが幸でも不幸でも…想像してみるのは楽しいと思いませんか？」
「確かに…ゲームもやりながら色々な展開を想像しちゃうなあ」
　もし、あの世界が私の前世なら…
　きっと私はあの世界では今ぐらいの歳で永い眠りについていると思う。
　でもそこにいたヒナタくんはきっと…泣いてくれてたんじゃないかな？だとしたら…
「あの世界が前世だったとして、私が主人公だったとしたら、きっとクリア特典を目指してたんだろうな。いや、イベントや隠し要素、何から何までクリアした後の、コンプリート特典を目指してたのかも。きっとそれが、私の望む物だったのかもしれない」
「ほう。それはなんでしょう？」
「ふっふっふ…それはアンペル先生の想像にお任せしましょう」
「おや、これは上手い返し方をされましたね」
「むぅ～！全然出来なーい！」
「サァナ!?」
　突然大声をあげて投げやりになるリシテアにびっくりするサナリスを見て、二人は笑った。そんな笑い声が聞こえる中、遠いところから違う声が聞こえる。
「おーいナナミー！ちょっといいかー！」
「あ、ヒナタくん…にコマエダくんも」
「今からヒナタクンとポケモン勝負をしようと思ってて、ジャッジしてくれる人を探してたんだよ！まさかこんなすぐに見つかるとは思わなかったなあ！やっぱりボクってツイてるよ！」
「ほうほう。いいよ。アンペルさん、それじゃあまた」
「はい。またいつか、めぐり逢いましょう」
　アンペルは立て札を元に戻し、リシテアにコツを伝授する。人が来るまで教えようと思っていたら、すぐに客がやってきた。
「マヒルさんに、ヒヨコさん。こんにちは」

「こんにちは」
「アンペルおにぃ！こんにちはだよー！マヒルおねぇ、どれにするー？」
「そうね…気になってるのは、このワンパチの顔をしてるフレンチトーストかな」
「じゃあそれ二つ！」
「かしこまりました。リシテア、しっかり見ててください」
「はいっ！」
?????????????????????????
「よお、お前らもこのカフェ好きなのかよ？」
「うわっ、クズリュウおにぃ！ペコヤマおねぇ！」
「うわとはなんだ…」
「ふんふん。ウインディ戦闘不能だね…コマエダくんの勝利だよ」
「くそぉ、コマエダずるいぞ～」
「いやぁ、まさかトゲキッスが運良く〟でんじは〟を当ててくれて、運良く〟エアスラッシュ〟でウインディが怯んでくれるなんてね…」
「いや絶対狙っただろ！〟だいもんじ〟で火傷を負わせた時はよしっ！って思ったんだけどなぁ」
「コマエダくんの幸運は、不幸になった分返ってくるから…」
「でも〟エアスラッシュ〟のひるみが５回連続だったのは本当に偶然だよ？」
「何言ってんだ…」
「だって普通そこまで耐えないよ。心配させまいと踏ん張ってたんだよ、ヒナタクンのウインディは」
　ウインディが申し訳なさそうにヒナタくんを見てる。…でもヒナタくんは優しく身体を撫でてる。
　ーーやっぱりコンプリート特典を手に入れたくて頑張ってたんだろうなあ。きっと、どうにかしてクリアしたんじゃないかな？あ、もしかしたら主人公はヒナタくんなのかも。
「あれ？ナナミさん、今日はご機嫌な感じだね？」
「え？そう？」

「ああ。俺もそう思う。何かあったのか？」
「うーん…前世の私を想像してたんだ」
「前世？」
「うん。前世で私たちが会ってたら…って想像」
「それは興味深いね。それで、ナナミさんはその想像をしてて、どう思ったの？」
「コンプリート特典欲しいなって」
「あれ？ゲームの話になってる？」
「コマエダ、これがナナミの通常運転だぞ。で？そのコンプリート特典はなんなんだ？」
「それはね…」
　全部終わった後もう一度会えるの。
「……それは確かに欲しい特典だね。ね、ヒナタくん？」
「ああ。間違いないな」
「そうでしょ？だからこの世界でも私はオールクリア目指すぞ～。ヒナタくんも、コマエダくんも手伝ってね」
「何をだよ…」
「ヒナタクン、これがナナミさんの通常運転だよ」
…まあ、その通りだよな。